

# 唐崎城跡・尼崎学園古墳群 発掘調査報告書



2014  
神戸市教育委員会

# 唐崎城跡・尼崎学園古墳群発掘調査報告書

2014

神戸市教育委員会



## 序

尼崎学園古墳群の所在する道場町は、数多くの文化財が知られた地域です。昭和初期に、当地域の古墳から発見されと伝えられる須恵器は、現在も塩田八幡社に大切に保管されています。また1970年代から開始された圃場整備事業に伴なう埋蔵文化財発掘事業では、地元の理解と協力の下に多くの調査成果が得られました。

このように文化財に対する深い理解と高い関心を持つ地元の方々からの要望を受け、教育委員会文化財課は、毎年、道場町の神戸市立農村環境改善センターで開催される文化祭に、出張展示をさせていただいています。

また2000年から南所古墳では、地元の理解と協力を得て大手前大学によって発掘調査が行われました。さらに2007年には塩田北山東古墳で、全国的にも希少な三角縁仏獣鏡が発見され、全国的にも大きな話題となりました。

このように文化財を大切にし、伝え、活かそうとする地域で、今回尼崎学園園舎改築に伴なう発掘調査を実施しました。この調査成果を公表するために本書を作成いたしました。当報告書が地域の歴史を知るための一資料として活用されることを希望いたします。

この報告書を刊行するにあたり、現地調査及び報告書作成作業に、ご理解ご協力いただいた尼崎市及び尼崎市社会福祉事業団尼崎学園をはじめ関係諸機関ならびに関係各位にたいしまして厚く感謝いたします。

2014年3月31日  
神戸市教育委員会

## 例　言

1. 本書は、神戸市北区道場町塩田3083番地で実施した学園建設に伴なう発掘調査の報告書である。
2. 現地における調査は、平成24年12月4日から平成25年3月22日・平成25年5月1日から平成25年5月8日の期間で実施し、神戸市教育委員会文化財課 口野博史が担当した。
3. 遺物整理作業は、平成25年度に神戸市埋蔵文化財センターで実施し、文化財課 藤井太郎、中村大介、口野が担当した。遺物写真の撮影は、西大寺フォト 杉本和樹氏が行なった。
4. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「三田」、「武田尾」神戸市発行の2,500分の1地形図「塩田」、「鎧射山」の一部を使用した。
5. 本書に用いた方位・座標は、平面直角座標系世界測地系で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で示した。
6. 本書の執筆は、「第2章　調査の成果　出土遺物」の鉄製品については、文化財課 中村の助言の下、口野が執筆した。これ以外は口野が担当し、編集を行なった。出土遺物ならびに図面・写真は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
7. 発掘調査の実施ならびに本書の刊行に際しては、事業主である尼崎市に多大なるご協力をいただいた、記して感謝を申し上げます。

### 調査組織

平成24～25年度

神戸市文化財保護審議会	史跡・考古資料担当
工楽 善通	大阪府立狭山池博物館長（平成24・25年度）
和田 晴吾	立命館大学文学部教授（平成25年度7月まで）
菱田 哲郎	京都府立大学文学部教授（平成25年度7月から）
教育委員会事務局	
教育長	永井 秀憲（平成24年度） 雪村新之助（平成25年度）
社会教育部長	東野 展也（平成24・25年度）
文化財担当部長（文化財課長事務取扱）	安達 宏二（平成24・25年度）
埋蔵文化財担当課長（埋蔵文化財係長事務取扱）	千種 浩
担当係長	丹治 康明・安田 滋（平成24年度） 前田 佳久（平成25年度）
埋蔵文化財センター担当係長	斎木 巍（平成24・25年度）
事務担当学芸員	中谷 正（平成24年度） 井尻 格（平成25年度）
調査担当学芸員	口野 博史
保存科学担当学芸員	中村 大介
遺物整理担当学芸員	藤井 太郎（平成24・25年度）

## 目 次

### 序

### 例言

第1章 調査に至る経過	1
1. はじめに	1
2. 歴史的環境	1
3. 調査経過	9
4. 調査日誌抄	10
第2章 調査の成果	11
1. 調査方法	11
2. 基本層序と地形	11
3. 調査の概要	13
4. 弥生時代の遺構	13
5. 古墳時代の遺構	14
6. 中世の遺構	30
7. 出土遺物	33
第3章 まとめ	39

第20図 SK01平面及び断面図	29
第21図 SX02遺物出土状況平面図	30
第22図 ST01平面・断面及び見透図	31
第23図 ST02平面・断面及び見透図	32
第24図 包含層出土遺物実測図	33
第25図 建物出土遺物実測図	34
第26図 土坑出土遺物実測図	35
第27図 土坑・溝状遺構等出土遺物実測図	37

表1 堪穴建物・掘立柱建物一覧表	28
------------------	----

挿図1 発掘調査説明資料表紙	9
----------------	---

### 挿図、挿図写真等目次

第1図 唐崎城跡・尼崎学園古墳群調査地位置図	1
第2図 周辺主要遺跡分布図	3
第3図 調査地位置図及び周辺古墳分布図	5
第4図 調査区域経過図	9
第5図 調査地区割図	11
第6図 調査区北壁及び西壁断面図	12
第7図 調査区及び古墳断面合成図	13
第8図 調査区及び古墳群合成平面図	15
第9図 調査区平面図	17
第10図 SB05平面及び断面図	18
第11図 SK02平面及び断面図	19
第12図 SB01・SB02・SB03・SB08平面及び断面図	20
第13図 SB04平面及び断面図	21
第14図 SB06平面及び断面図	22
第15図 SB07平面及び断面図	23
第16図 SB09平面及び断面図	24
第17図 SB10平面及び断面図	25
第18図 SB11平面及び断面図	26
第19図 SB12平面及び断面図	27

挿図写真1 重機掘削作業風景	10
挿図写真2 調査作業風景	10
挿図写真3 3区北SB01～03検出作業風景	10
挿図写真4 調査説明会風景	10
挿図写真5 ラジコンヘリによる航空写真撮影	10
挿図写真6 道場小学校現地見学会風景	10
挿図写真7 遺物整理作業風景	10

## 写真図版目次

### カラー図版

1. 調査地全景（三田市街を望む）南から
2. 調査地全景（武庫川・福知山線を望む）西から
3. 調査地遠景（左奥頂部鎧射山）西から
4. 調査地垂直写真
5. 調査区全景 西から
6. 調査区全景 北西から
7. 出土石器集合写真
8. ST02出土土器集合写真

- PL12 SB04、SB02、SB05、SB06出土遺物写真  
PL13 SK02、SK01、SX01、SX02、SX05、ST01  
出土遺物写真  
PL14 ST01、SD02、SK18出土遺物写真  
PL15 出土鉄製品集合写真、出土鉄製品X線透過画  
像

### 写真図版

PL 1 1. SK01須恵器甕検出状況北から 2. SK  
02検出状況北から

PL 2 3. SX02須恵器甕検出状況北から 4. SX  
05遺物出土状況南東から 5. SK18遺物出土状況  
北東から

PL 3 6. SB01・SB02・SB03全 景 西 か ら 7.  
SB04・SB06全景北東から

PL 4 8. SB06全景北東から 9. SB07・SB12全  
景東から

PL 5 10. SB04・SB05全景北から 11. SB10全景  
西から

PL 6 12. SB09全景南西から 13. SB11全景北西  
から

PL 7 14. 調査区全景北から 15. ST01・ST02と  
古墳群北西から

PL 8 16. ST01箱式石棺検出状況南西から 17.  
ST02箱式石棺検出状況南東から

PL 9 18. 調査区東南部全景北西から 19. 調査  
区全景西から

PL10 20. SB02-SK1土師器甕出土状況 21.  
SB03-P2須恵器壺出土状況 22. 平成25年度調査  
北拡張地区東から

PL11 包含層出土遺物写真、SB01、SB03出土遺物  
写真

## 第1章 調査に至る経過

### 1. はじめに

尼崎学園古墳群<sup>1)</sup>が、古墳として地名表<sup>1)</sup>に登載されるのは1956(昭和31)年である。この地名表には、古墳は3基と記録されている。この地名表以前には、1929(昭和4)年編纂の「有馬郡誌」<sup>2)</sup>に生野周辺には「古墳群頗る多く」と記載がある。直接的な記述ではないが、現状で知られる最も古い記録ではないかと思われる。また「唐崎城址」と城址としても記載がある。

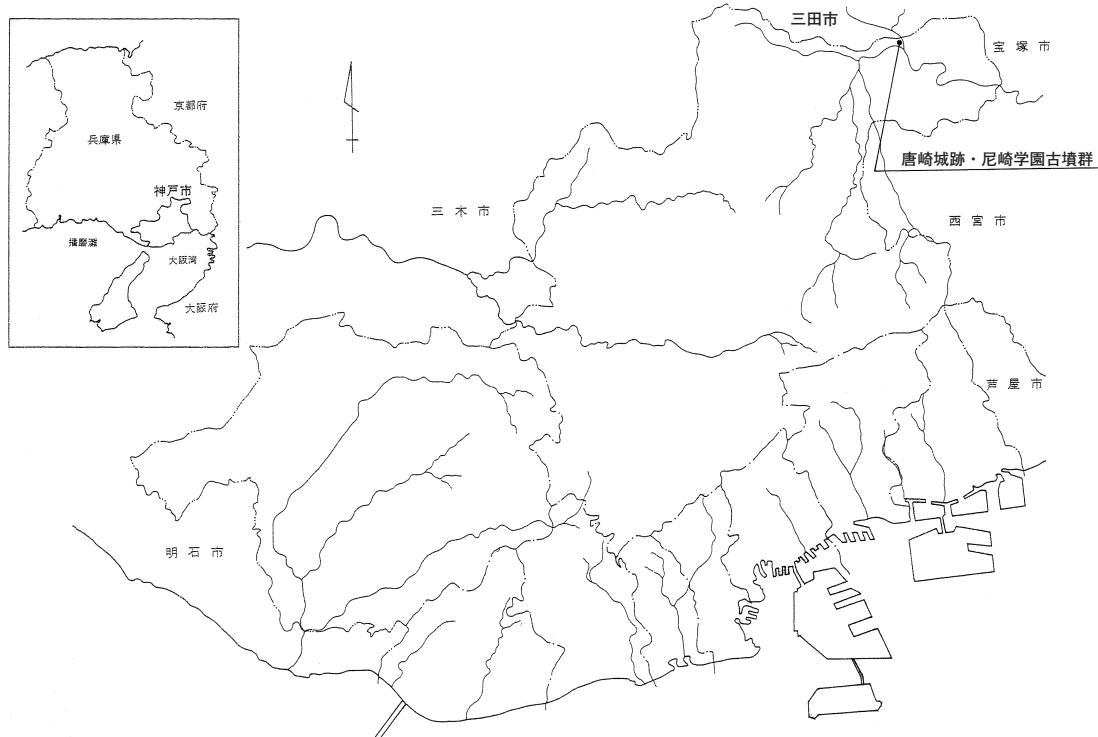
この後、文化財保護のため、遺跡が埋蔵文化財として周知されるように、全国的に分布調査と登載作業が1960(昭和35)年以降開始された<sup>3)</sup>。同調査作業の結果、1973(昭和48)年に神戸市教育委員会から、分布地図及び地名表<sup>4)</sup>として発行される。分布地図には尼崎学園古墳群は、6基からなる古墳群で、4号墳石室に「たなあり」という調査結果が記載された。

さて尼崎学園は、当初戦災孤児等を保護する施設として、1946(昭和21)年に尼崎市によって開設された<sup>5)</sup>。尼崎学園の所在する北区道場町塩田は、神戸市と三田市の市境に近接し、武庫川の流れを望む自然に恵まれた環境のなかにある。

現在の建物は、鉄筋コンクリート2階建て(1972年完成)である。施設の老朽化もあり、設備の充実と現代社会の様々な要求に対応するために、施設を既存建物の南側に新築する計画となつた。

### 2. 歴史的環境

当報告遺跡の位置は、神戸市域の北東端にあたり、神戸市と三田市の市境に近接する箇所である。武庫川と有馬川の合流地点のすぐ南西で、南から伸びる丘陵の先端部分にあたり、標高は157m前後である。北側の三田盆地には、三田市街地がひろがる。市境となる東西方向の八景丘陵をはさんで南側で、長尾川、八多川、有野川、有馬川が合流し、道場、塩田の耕作地が



第1図 唐崎城跡・尼崎学園古墳群 調査地位置図

ひろがる。河川の合流する箇所で古来より交通の要衝である。

上記のような調査地周辺の歴史的環境について、以下略述する。調査地周辺における旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡数は非常に少ない。現状で最も古い時代に位置づけられる遺跡としては、サヌカイト製翼状剥片が採取された三田市天神遺跡40があげられる。続く縄文時代早期から前期頃の遺跡として遺構からの出土ではないが、北神N T No.9 地点遺跡21では有茎尖頭器、宅原遺跡豊浦地区25では有茎尖頭器や石匙、石鏸の出土遺物が知られている。

次に縄文時代の遺跡を追うと宅原遺跡内垣地区では、後期中津式土器の出土が知られている。対中遺跡36では、縄文時代晚期長原式が出土しており、塩田遺跡7では同時期の石鏸等が出土している。他に小坂遺跡14でも石鏸等が出土している。

次にこの地域に稻作文化が展開し始めた時期の遺跡として、前述の対中遺跡があげられる。ここでは、弥生時代前期溝状遺構から晩期縄文土器と前期弥生土器が出土している。また前期と考えられる水田も検出されている。

中期には、この周辺での遺跡数が増加する。中期前葉に属する遺跡として武庫川左岸三輪餅田遺跡35があげられる。「塩田石」製石包丁未製品が多く出土しており、石包丁製作に関わる集落址とも考えられる。時期はやや下り、同様に「塩田石」製石包丁未製品が出土し、石包丁製作に関わる遺跡として塩田遺跡、古城遺跡・三田城跡39、天神遺跡などがあげられる<sup>6)</sup>。また古城遺跡・三田城跡、天神遺跡では、方形周溝墓、川除・藤ノ木遺跡41では、後期末の円形周溝墓が検出されている。

また調査地の東約1km標高327mの鎧射山山頂付近（鎧射山遺跡・鎧射山城跡2）から、1953年頃山道改修中に粘板岩製銅劍型石劍が発見されている。また塩田遺跡の堅穴建物内からは、鉄劍形磨製石劍が出土している。

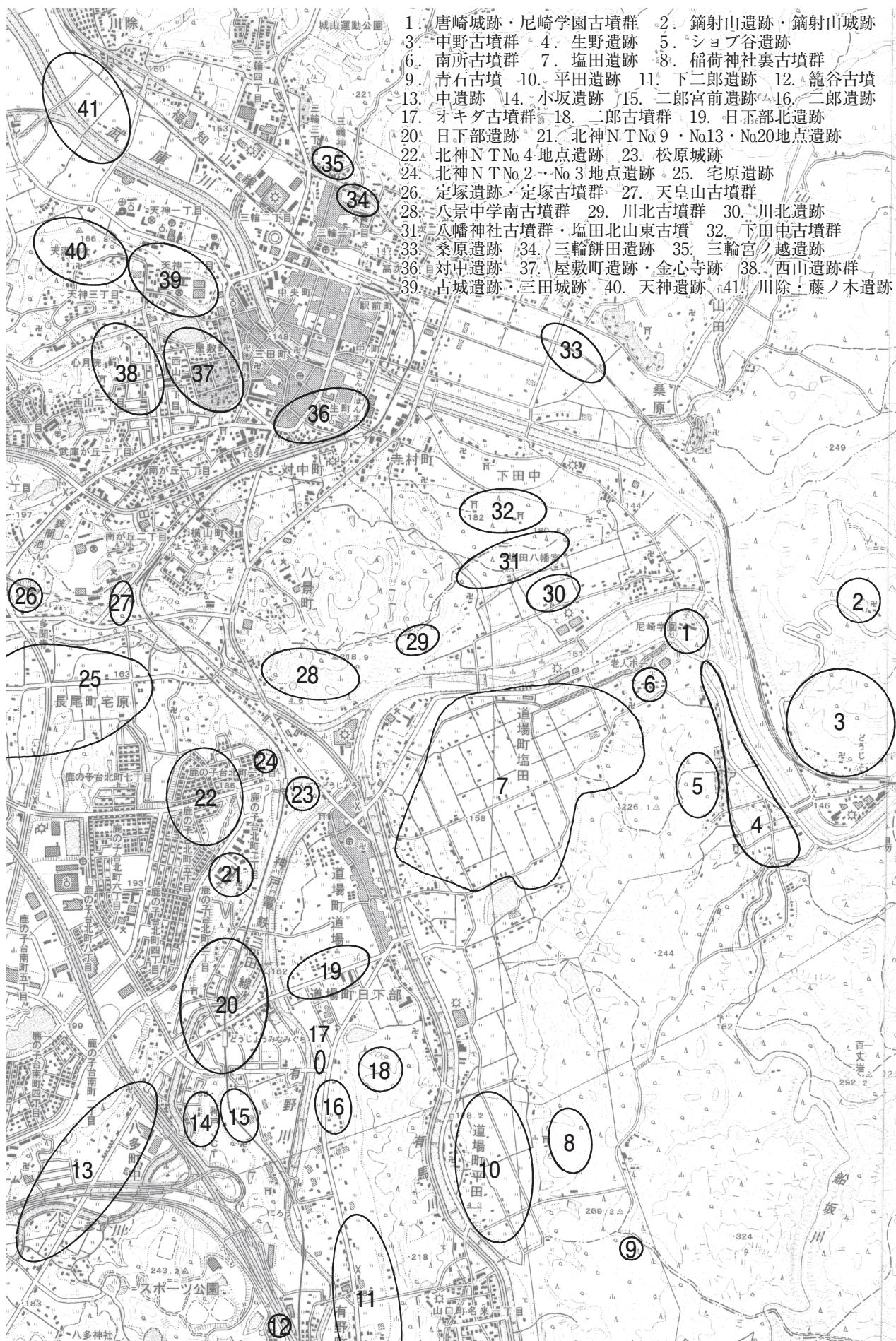
中期後葉には、この周辺での遺跡数がさらに増加する。「魏志倭人伝」<sup>7)</sup> 中「倭国乱」の記述に対応するならば、西日本を中心に争乱があり、いわゆる高地性集落が出現し遺跡数が増加する現象と捉えられる。1970年頃から始まる北神ニュータウン及び北摂ニュータウンの大規模開発「神戸三田国際公園都市」に伴なう発掘調査によって、丘陵上の遺跡の実態が解明された。図2にはないが、有鼻遺跡<sup>8)</sup>では、堅穴建物60棟、掘建柱建物9棟、奈カリ与遺跡<sup>9)</sup>では、堅穴建物30棟と大規模な集落が営まれる。この時期からやや遅れて北神N T No.4 地点遺跡22が営まれる。丘陵上で堅穴建物3棟が検出されている。また実態は不明であるが鎧射山遺跡・鎧射山城跡も高地性集落の可能性が指摘されている。

他に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡として、宅原遺跡、桑原遺跡、三輪餅田遺跡、対中遺跡、川除・藤ノ木遺跡などがあげられる。宅原遺跡では、その後広範囲の遺跡内を移動しながら、集落は存続していく。

同様の時期の墓址として、土器棺3基、木棺墓1基が検出された北神N T No.45地点遺跡や5基からなる定塚遺跡・定塚古墳群26、天皇山古墳群27があげられる。ともに墳丘墓として捉えることができ、出土した土器から弥生時代最終末期の時期が考えられる。

前期古墳として塩田北山東古墳31があげられる。2007年の調査までこの地域では、前期古墳の存在は知られていなかった。全長35mの前方後円墳で、粘土櫛の埋葬施設4基が検出され、第1埋葬施設から三角縁仏獸鏡、管玉、ガラス小玉、第2埋葬施設から碧玉製紡錘車形石製品、鉄劍などが出土している。4世紀前半頃の古墳と考えられる。

川除・藤ノ木遺跡の後期末の円形周溝墓や定塚古墳群、北神N T No.45地点遺跡などから、当



第2図 周辺主要遺跡分布図 S : 1 / 25,000

地域この時期における、階層分化の進行を見ることができる。そして地域ごとに首長が誕生してゆき、權威、權力をより集約していく時期にあたるのではないかと思われる。

続く時期の古墳としては、北神N T No.9 地点1号墳があげられる。14m×11mの長方形墳で、埋葬主体は割竹形木棺である。4世紀前半頃の古墳と考えられる。しかしながら現状で当地域には、5世紀代の前方後円墳が存在しない。

6世紀代の古墳として、北神N T No.13地点がある。直径15mの円墳と推定され、埋葬主体は川原石を組んだ小型の竪穴式石室である。構造から竪穴系横口石室とも考えられている。供獻土器として須恵器壺蓋・身、壺が出土している。

また近年大手前大学によって調査された、南所古墳群南所3号墳6がある。直径18mの円墳で、埋葬主体は、左片袖式横穴式石室で、出土遺物と石室構造から6世紀前半とされる。また墳丘東裾には、同時期につくられた箱式石棺が1基検出されている。

北神N T No.3 地点24は、全長36mの前方後円墳で、埋葬主体は左片袖式横穴式石室で、須恵器の他に馬具、鉄鏃、ガラス小玉などが出土している。奥壁には、「○」の線刻がある。6世紀中頃の築造と考えられる。

北神N T No.9 地点2号墳は、直径15mの円墳に復元される。東・中央・西の3基の箱式木棺を埋葬主体とする。特殊な遺物として東棺からは、皮袋形提瓶が出土している。6世紀中頃の古墳と考えられる。

北神N T No.2 地点は、直径17mの円墳で、埋葬主体は両袖式横穴式石室である。6世紀後半の時期が考えられる。石室入口北側で、ほぼ同時期の小箱式石棺が1基検出されている。今述べた北神N T No.2・No.3 地点遺跡は、神戸電鉄道場河原駅のすぐ北側で、保存、整備され、公園として公開されている。

他に八景丘陵の東北部北斜面に下田中（上山）古墳群32がある。前方後円墳1基、円墳31基、低墳丘方墳36基総計68基からなる、5世紀末から6世紀初頭の時期に営まれた古墳群である。

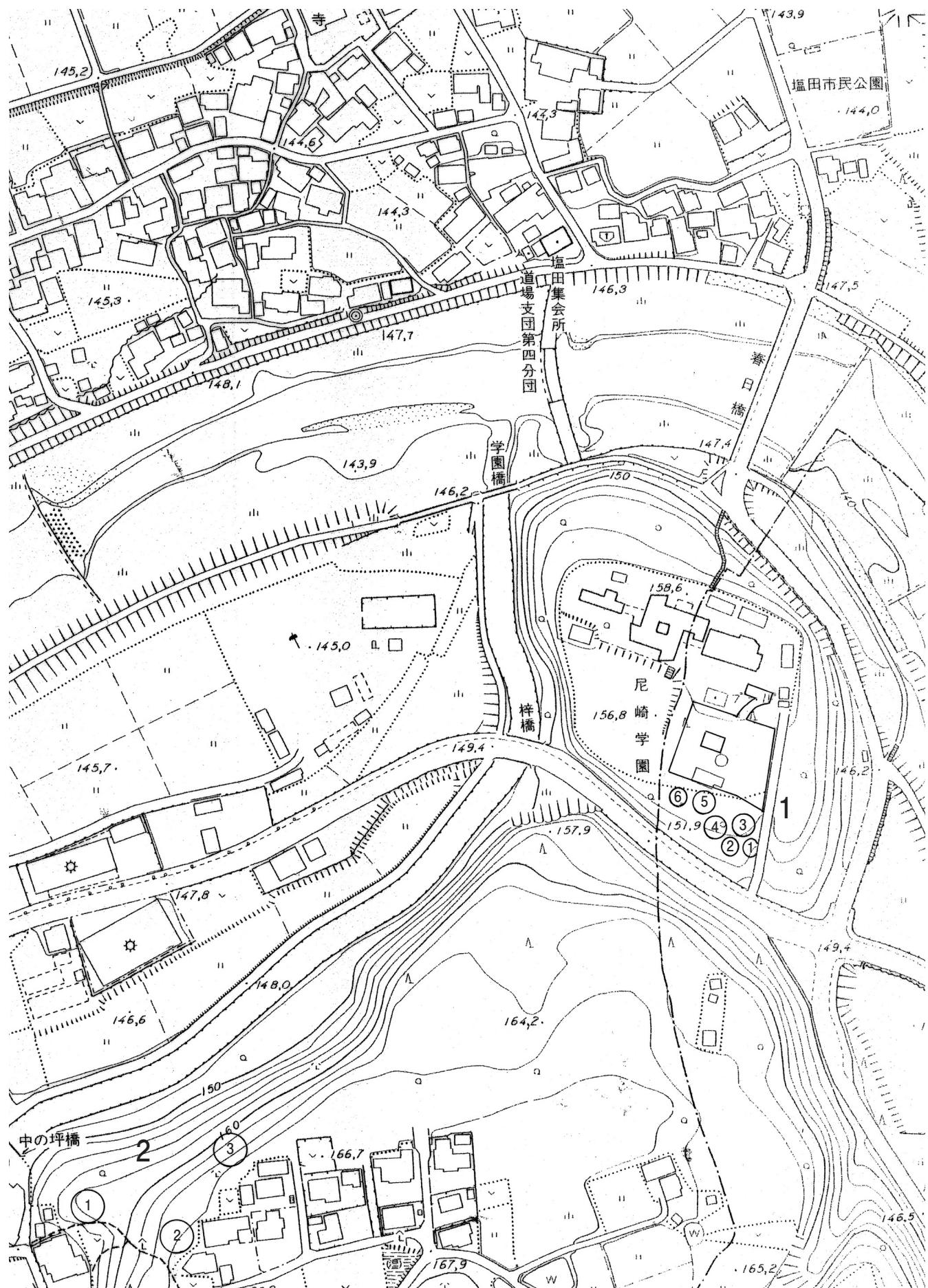
当地域は前期、中期の古墳分布が希薄であるが、後期から終末期にかけてのいわゆる群集墳等は数多く分布し、これまで多くの研究がなされてきた<sup>10)</sup>。しかしながら発掘調査が実施された例は少なく、その実態は不明な点も多い。主なものとして唐崎城跡・尼崎学園古墳群、中野古墳群3、ショブ谷遺跡5、南所古墳群、稻荷神社裏古墳群8、小坂遺跡、二郎古墳群18、天皇山古墳群、八景中学南古墳群28、川北古墳群29などがあげられる。

前項でのべた尼崎学園古墳群4号墳の埋葬主体は、石棚付両袖式横穴石室である。類例として有棚横穴石室は、兵庫県下で10基ほど知られている。周辺では武庫川上流域に東仲古墳、加茂古墳群32号墳がある。また宮脇古墳群第12号墳では、左側壁に棚というより突起状石材が2箇所組み込まれている石室が知られている<sup>11)</sup>。

これらにやや遅れて築造される古墳として、オキダ古墳群17、青石古墳9、北神N T No.21・22地点遺跡（第2図記載無）<sup>12)</sup>、籠谷古墳12、No.20地点遺跡などがあげられる。

オキダ古墳群は、5基からなる古墳群である。調査された2号墳は、墳丘は削平され、残存した石室床面から埋葬主体を無袖式横穴式石室とする古墳であることが判明した。出土遺物から6世紀末から7世紀初頭頃の時期が考えられる。青石古墳は、直径約12mの円墳に復元される古墳で、無袖式横穴式石室をもち、6世紀末から7世紀初頭頃の築造と考えられる。

北神N T No.20地点遺跡は、径10mほどで墳形は不明である。埋葬主体を無袖式横穴式石室と



第3図 調査地位置図及び周辺古墳分布図 1/2,500

1 尼崎学園古墳群1～6号墳 2 南所古墳群1～3号墳

する古墳である。出土遺物から7世紀前半頃と考えられる。籠谷古墳は、直径約8mの円墳で、墳丘谷側に列石をもつ。無袖式横穴式石室で7世紀前半頃の築造と考えられる。

水系など大まかな地域ごとの集落遺跡と古墳群のまとまりを捉えていくと、次の奈良時代の「郷<sup>13)</sup>」や「郡」さらに下った時期の荘園などに結びついていくまとまりとして捉えていくことができる。

奈良時代の遺跡では、屋敷町遺跡・金心寺跡37があげられる。土壇状遺構や瓦当の出土があり、有馬郡での唯一の古代寺院と考えられる。他に北神N T No.4地点遺跡では、奈良時代前半の蔵骨器が検出されている。また宅原遺跡24では、木製面や「評」、「五十戸□」の墨書き土器が出土しており、周辺に官衙末端組織にあたるであろう遺構の存在が考えられる。他に日下部北遺跡19、桑原遺跡、対中遺跡、川除・藤ノ木遺跡などで奈良時代の遺構が検出されている。掘立柱建物、文字史料、寺院址など律令制と仏教による国家形成の胎動が垣間見える。

平安時代から鎌倉時代にかけての、集落遺跡は数多く知られている。平田遺跡10は、奈良時代から平安時代にかけての遺構が確認されている。これに続く時代の遺跡として北約1kmには塩田遺跡、西約1kmには二郎宮前遺跡15が存在する。ともに居館址と考えられる掘立柱建物が検出されている。他に同様の時期の居館址として考えられる遺跡は、宅原遺跡や対中遺跡があげられる。荘園（塩田荘、宅原荘、八多荘）<sup>14)</sup>ごとの居館址として捉えることができるようである。

また居館址を検出する遺跡の周辺には、同時期の集落遺跡として生野遺跡4、下二郎遺跡11、中遺跡13、二郎遺跡16、日下部北遺跡、日下部遺跡20、川北遺跡30などあげられる。また西山遺跡群38は、三田市旧市街地の丘陵上に存在する中世集落祉で、集落の構造を知る上で重要な資料を提示している。

城址遺跡として唐崎城跡・尼崎学園古墳群、鎧射山遺跡・鎧射山城跡、ショブ谷遺跡（六郷城）、小坂遺跡（小坂砦跡）、松原城跡23、屋敷町遺跡・金心寺跡、古城遺跡・三田城跡、天神遺跡などが知られている。城の構造や造営時期などほとんど未解明である。

文献<sup>15)</sup>では、南北朝期に「貴志荘の貴志義氏が、1338（建武五・暦応元）年北朝方として湊川、鎧射要害、瓦林、兵庫、唐崎城など転戦した」とある。当調査地の唐崎城をはじめ、周辺の地名と城址が数多く記録されている。

塩田遺跡の南東尾根上では、室町時代の火葬墓<sup>16)</sup>がある。また北神N T No.4地点遺跡の南側には、北神N T No.47地点遺跡<sup>17)</sup> 室町時代の火葬墓約80基検出されている。

近世の遺跡として、三田城、三田陣屋、武家屋敷などの遺構が検出される屋敷町遺跡・金心寺跡、古城遺跡・三田城跡がある。また道場河原は、四方からの交通路の要衝であるが、元禄期には幕府から宿場駅として指定を受け繁栄したことが、「絵図」<sup>18)</sup>からも明らかである。三輪宮ノ越遺跡の北側には、三輪明神窯跡群がある。江戸時代後期から昭和にかけて操業された磁器窯である。また北神N T No.5・No.6地点遺跡は、近世の石材採掘址が発掘調査されている。他に北神N T No.9地点では、近世末頃の一字一石経塚1～5号が検出されている。

以上各時代の遺跡を羅列して述べてきた。旧石器時代から近現代に至るまで、様々な遺跡があり、古墳群や城址も自然とともに数多くあり、歴史豊かな地域である。

〔注〕

- 1) 神戸市「神戸地方古墳地名表－旧武庫・菟原・八部・有馬・美濃・明石の各部－」経済局観光課神戸地方古墳調査保存準備の會1956
- 2) 有馬郡誌編纂管理者・山脇延吉「有馬郡誌」1929
- 3) 「埋蔵文化財発掘調査の手びき」文化庁文化財保護部1966
- 4) 「神戸市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表」垂水区・兵庫区第1集神戸市教育委員会1973
- 5) [参考] Web版尼崎地域史事典『apedia』2006
- 6) 高木芳史「畿内地方の石包丁の生産と流通」国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－1999・岸本一宏「いわゆる「塩田石」製の石包丁製作について」市史研究「さんだ」第12号考古論考特集三田市2010
- 7) 「新訂魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋倭国伝」石原道博編訳岩波書店1985
- 8) 「三田市北摂ニュータウン内遺跡調査報告書」Ⅳ兵庫県文化財調査報告第185冊兵庫県教育委員会1997
- 9) 井守徳男他「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書」Ⅱ兵庫県文化財調査報告第16冊兵庫県教育委員会1983
- 10) 太田陸郎「摂北特殊構造古墳二例」考古学雑誌第22巻第8号1932・樋本誠一「兵庫県下における前方後円墳」兵庫県埋蔵文化財調査集報第2集1974・栗山伸司「北摂における古代勢力の性格－有馬郡内の動向を中心として－」古代研究61975・井守徳男「畿内周縁部における古墳の展開と終末－兵庫県三田盆地における群集墳と終末期古墳の関連を例として－」歴史における政治と民衆1986・樋本誠一「摂津・播磨の終末期古墳」兵庫県の歴史第25号兵庫県史編集専門委員会編1989・西岡巧次「摂津有馬郡における後期古墳の展開」長岡京古文化論叢Ⅱ1992など様々な研究成果がある
- 11) 「齊頼塚古墳」マキノ遺跡群調査団マキノ町教育委員会1998・花園大学考古学研究室「古墳測量調査集成Ⅰ」花大考古報告13 1998・「三田市史」第八卷通史考古編2010
- 12) 谷正俊・松林宏典・関野豊・阿部功「北神NT内第21・22地点遺跡」平成5年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1996
- 13) 「和名類聚抄」攝津国有馬郡「春木・幡多・羽束・大神・忍壁」・「神戸市史」歴史編Ⅱ古代・中世2010
- 14) 「兵庫県の中世城館・莊園遺跡」兵庫県教育委員会1982
- 15) 「貴志義氏軍忠状案」余田文書「兵庫県史史料編中世Ⅰ」兵庫県1983
- 16) 「塩田遺跡」昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1983
- 17) 丸山潔・黒田恭正「北神NT内第47地点遺跡」昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1986
- 18) 「文化七年道場河原村絵図」神戸市博物館蔵 神戸市史歴史編Ⅲ近世1992

〔参考文献〕(文献番号は周辺主要遺跡分布図と一致)

1. 神戸市教育委員会「北区の古墳（一）」神戸市史紀要神戸の歴史第14号1986
2. 種定淳介「銅剣形石剣試論」上・下考古学研究第36巻第4号・第37巻第1号1990
3. 神戸市教育委員会「北区の古墳（一）」神戸市史紀要神戸の歴史第14号1986
4. 口野「生野遺跡」昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1983
5. 安田滋・橋詰清孝「ショブ谷遺跡・稻荷神社裏古墳群」昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1994
6. 「南所3号墳試掘報告」大手前大学考古学研究室2001・「南所3号墳」大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター2009
7. 口野「塩田遺跡」昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1986・黒田「塩田遺跡」昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1987
8. 神戸市教育委員会「北区の古墳（一）」神戸市史紀要神戸の歴史第14号1986
9. 「青石古墳発掘調査報告書」西宮市教育委員会1974
10. 渡辺伸行「平田遺跡」昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1988
11. 山本雅和・阿倍敬生・池田毅「下二郎遺跡」平成元年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1992・谷・松林「下二郎遺跡」平成2年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1993

12. 「籠谷古墳・宅原遺跡」兵庫県文化財調査報告第71冊兵庫県教育委員会1990
13. 松林・阿倍敬「中遺跡」平成4年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1995・「八多中遺跡発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第216冊兵庫県教育委員会2001
14. 安田「小坂遺跡」平成7年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1998
15. 「公園都市線（第2期）車両留置施設設置事業に伴う二郎宮ノ前遺跡発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第220冊兵庫県教育委員会2001
16. 安田「二郎遺跡」昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1994
17. 西岡巧「オキダ古墳群発掘調査報告書」神戸市教育委員会1987
18. 宮本編「神戸の古墳」神戸市教育委員会2000他
19. 富山直人・斎木巖「日下部北遺跡」平成3年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1994・菅本宏明「日下部北遺跡第3次」平成5年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1996
20. 「日下部遺跡発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第215冊兵庫県教育委員会2001
21. 丸山・前田佳久「北神NT内遺跡」昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1988・宮本郁雄「北神ニュータウン内の古墳」神戸市史紀要神戸の歴史第12号1985
22. 丸山・山本「北神NT内遺跡」昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1987
23. 「兵庫県の中世城館・莊園遺跡」兵庫県教育委員会1982・川上厚志「松原城址」平成3年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1994
24. 菅本・安田・藤井太郎「北神NT内No.2地点古墳・No.3地点古墳」平成3年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1994
25. 丹治康明・西岡誠司「宅原遺跡（岡下地区）」黒田・前田「宅原遺跡（岡下地区）」昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1988・丸山・千種浩・山本・須藤宏「宅原遺跡（有井地区）」・宮本・池野素子「宅原遺跡（内垣地区）」昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1989・安田・谷・山口英正「宅原遺跡」昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1990・安田・佐伯二郎・橋詰「宅原遺跡」昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1994
26. 西岡巧「定塚1号墳」昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1990
27. 新修神戸市史編集委員会「新修神戸市史」第三章第三節歴史編I自然・考古神戸市1989・他
28. 宮本編「神戸の古墳」神戸市教育委員会2000・他
29. 宮本編「神戸の古墳」神戸市教育委員会2000・他
30. 須藤「川北遺跡」昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1990
31. 中村大介編「塩田北山東古墳」発掘調査報告書神戸市教育委員会2008
32. 「三田市史」第八卷通史考古編2010 兵庫県教育委員会では「下田中古墳群」・三田市教育委員会では「上山古墳群」
33. 「三田市史」第八卷通史考古編2010
34. 「三田市史」第八卷通史考古編2010
35. 「三田市史」第八卷通史考古編2010
36. 「対中」兵庫県文化財調査報告第60冊兵庫県教育委員会1988
37. 「三田市史」第八卷通史考古編2010
38. 「三田市史」第八卷通史考古編2010
39. 「三田城跡発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第194冊兵庫県教育委員会2000・「三田市史」第八卷通史考古編2010
40. 「三田市史」第八卷通史考古編2010
41. 「川除・藤ノ木遺跡」兵庫県文化財調査報告第104冊兵庫県教育委員会1992

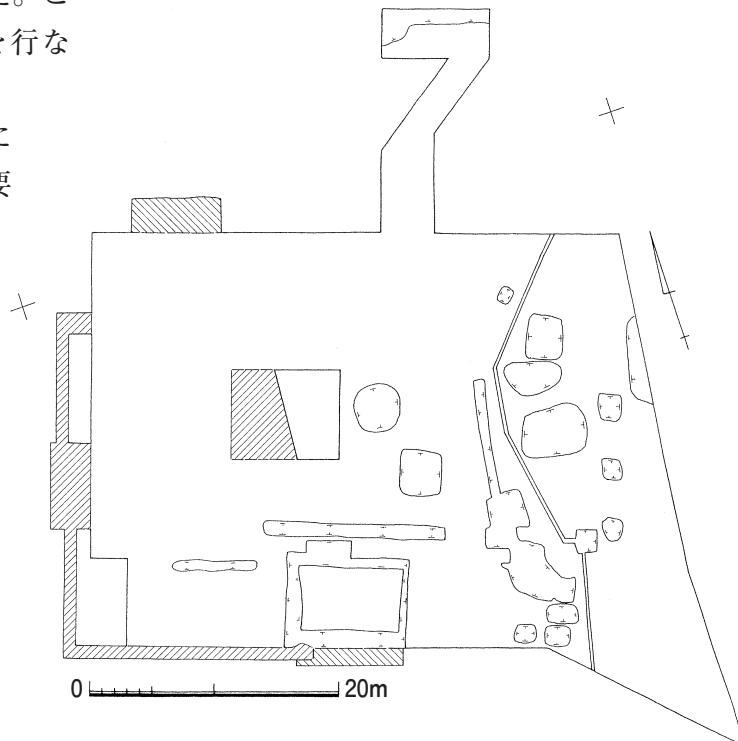
### 3. 調査経過

平成24（2012）年度に入り、尼崎市より尼崎学園施設整備の事業計画が神戸市に提出された。神戸市は、計画に基づき8月と10月に試掘調査を実施した。調査の結果、埋蔵文化財が存在することが判明した。さらに敷地内古墳の保存を含めた事業の実施計画が策定された。

現地調査着手までの事前協議により、建物基礎などによって遺構が損壊を受ける範囲について、尼崎市と神戸市双方で確認した。これに基づき現地にて隅出し作業を行ない、調査に着手した。

2013年2月頃、設計の見直し等により調査区を拡張（41m<sup>2</sup>）する必要が生じた。また合わせてSB06・SB10の規模、全容を把握するため、調査区を部分的に拡張（52m<sup>2</sup>）することを尼崎市に申し入れ、双方確認の上、計93m<sup>2</sup>を追加調査することとなった。

平成25年度は、設計変更により前年度調査区の南と北に拡張する形で約28m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。調査面積は、総計1686m<sup>2</sup>となった。



□ 平成24年度予定調査地区  
▨ 平成24年度拡張調査地区  
▨ 平成25年度調査地区  
**第4図 調査区域経過図**



**挿図1 発掘調査説明資料表紙**

#### 4. 調査日誌抄

##### 1. 調査に至る経過

2012, 09, 10 文化財保護法に基づく届出  
2012, 08, 30, 31・10, 02, 03 試掘調査  
発掘調査のための事前協議  
2012, 12, 04 現地発掘調査着手

##### 2. 調査経過（平成24年度）

2012, 12, 05 重機掘削作業開始



挿図写真 1 重機掘削作業風景



挿図写真 2 調査作業風景

2012, 12, 13 1 区SK01検出 古墳時代遺構



挿図写真 3 3 区北SB01～03検出作業風景

2013, 01, 29 6 区北西SK02検出  
弥生時代遺構確認  
2013, 02, 05 4 区南ST01・ST02検出作業  
2013, 02, 07 3 区北SB01～03検出作業  
2013, 02, 13 ST01・ST02内堆積土  
土壤水洗作業  
2013, 02, 21 西部一部拡張作業  
2013, 02, 28 中央中ノ島部分拡張作業

2013, 02, 26 調査説明会開催 参加者44名



挿図写真 4 調査説明会風景

2013, 03, 06

航空写真  
撮影実施



挿図写真 5 ラジコンヘリによる航空写真撮影

2013, 03, 07 紙排水管設置箇所拡張作業

2013, 03, 22 現地調査完了

##### 3. 調査経過（平成25年度）

2013, 05, 01～08 北・南拡張区調査

2013, 05, 08 道場小学校 6 年生歴史授業30名



挿図写真 6 道場小学校現地見学会風景

##### 4. 遺物整理

2013, 04, 01 遺物整理開始 埋蔵文化財センターにて



挿図写真 7 遺物整理作業風景

## 第2章 調査の成果

### 1. 調査方法

発掘調査は、試掘調査の結果に従い表土を重機で掘削し、それ以下を人力によって調査を行なった。残土は運搬用トラックにて調査区西側の残土仮置場に運搬した。また必要に応じてベルトコンベアを使用して調査作業の効率化をはかった。

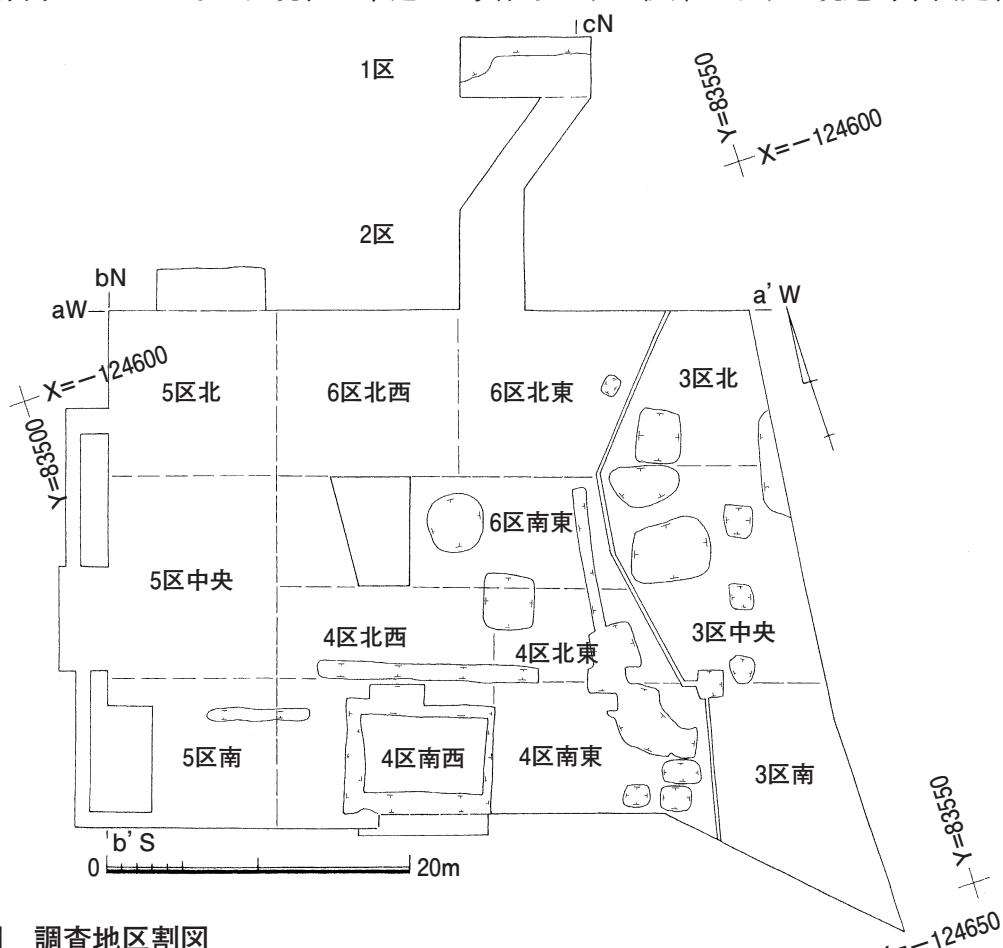
調査は、遺構毎に1/20平面及び断面実測を行ない、必要に応じて1/10等平面及び断面実測図を作成した。調査区に基準点測量を行ない、またラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を実施した。さらに調査区とその南に現存する古墳群との関係を示す合成図（第8図）も作成した。

調査地区は、北端の連絡通路を1区、2区とし、計画建物を巡り時計回りに区割りを行なった。地区毎に遺物の取り上げを行なった。遺物出土量は、28ℓコンテナに18箱であった。

### 2. 基本層序と地形

基本層序は、単純化して述べると上層から現代盛土、旧表土、茶褐色泥砂（遺物包含層）、黄褐色砂泥（遺構面、地山）となる。茶褐色泥砂層から土師器、須恵器などが出土した。また茶褐色系の堆積土の遺構は、概ね古墳時代に属する。

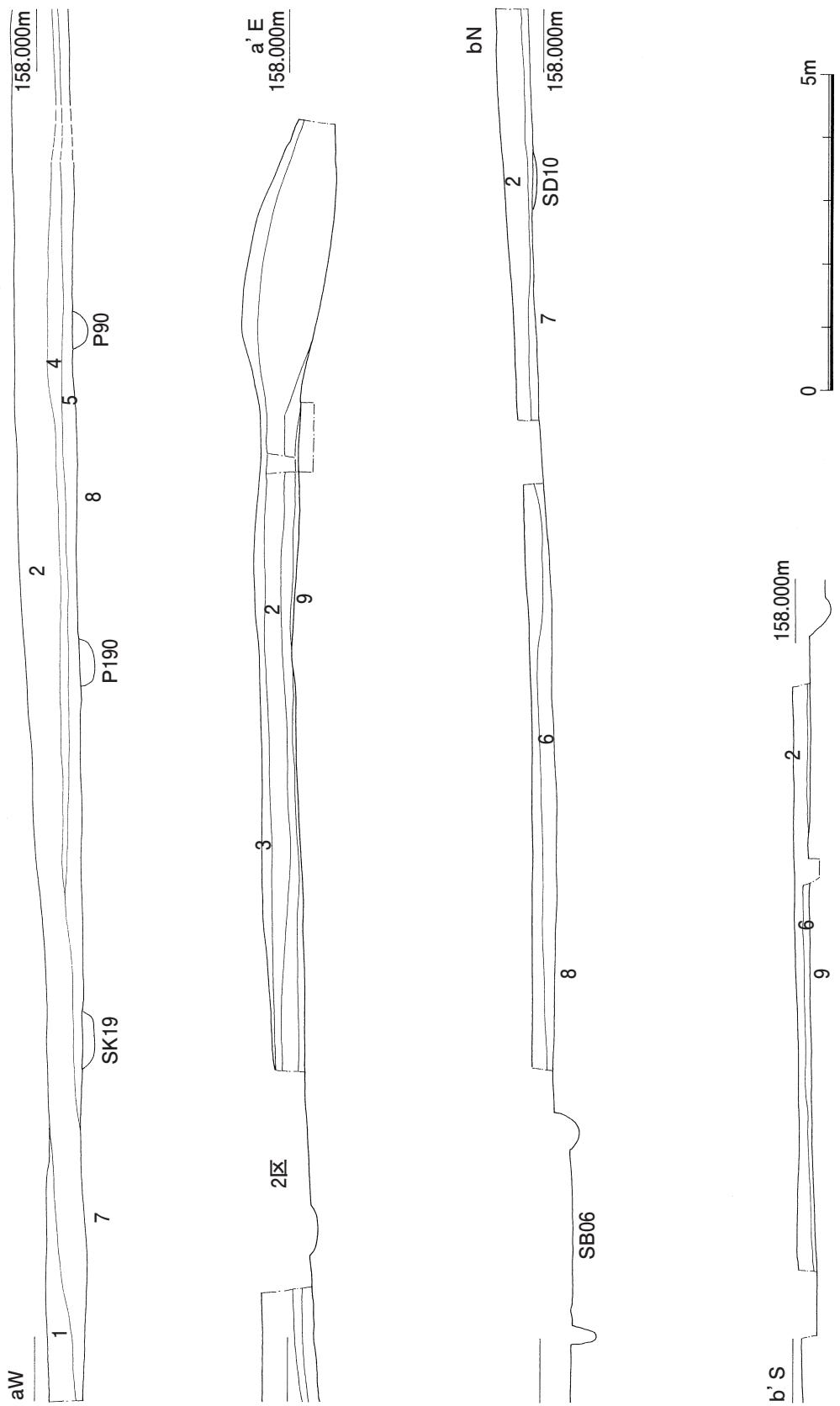
第3図を見ると、南から北にのびる尾根の西側斜面に、南所古墳群がある。南所3号墳石室床面の標高は164mである。現在の県道327号線あたりが鞍部となり、現尼崎学園建物へ向かっ



第5図 調査地区割図

a W～a' E・b N～b' S・c N～c' S：断面図





第6図 調査区北壁及び西壁断面図  
 上2図 北壁東西断面図 下2図 西壁南北断面図  
 1 現代盛土 2 旧盛土 3 厚植土 4 旧耕土 5 茶褐色泥砂(遺物包含層) 6 濁赤褐色砂泥  
 7 黄褐色砂泥 8 淡赤褐色砂泥 9 淡赤褐色泥砂泥 7~9 遺構面(地山)

てやや高くなり（標高159m）、有馬川へ一気に約15m下がる。この鞍部南東斜面の高まりに尼崎学園古墳群があり、古墳群すぐ北側の標高157m前後の平坦面が今回の調査地である。

南北方向に、1・2区から6・4区を経て4号墳、県道までの断面図（第7図）を作成した。古墳が位置する箇所はやや高く、今回の調査区は平坦で、北に向かって緩やかに上がっていくことがわかる。

### 3. 調査の概要

検出された遺構は、弥生時代、古墳時代、中世の3時期にわけられる。弥生時代の竪穴建物1棟、土坑、ピットなど、古墳時代の掘立柱建物5棟、竪穴建物6棟、箱式石棺2基、土坑、溝状遺構、ピットなどと中世の落ち込み状遺構などである。

### 4. 弥生時代の遺構

#### 1) SB05

5区南で検出された直径5.2m、深さ0.1mの円形の竪穴建物である。周壁溝は検出されなかった。平面図を反転させると、7本柱の竪穴建物であることが推定できる。柱間距離は1.6～2.1mとなる。支柱穴は、径0.2m、深さ0.3mほどの規模である。

中央土坑は、長径0.7m、短径0.4m、深さ0.2mの規模で、土坑やその周辺については特に焼けている状況ではなかった。

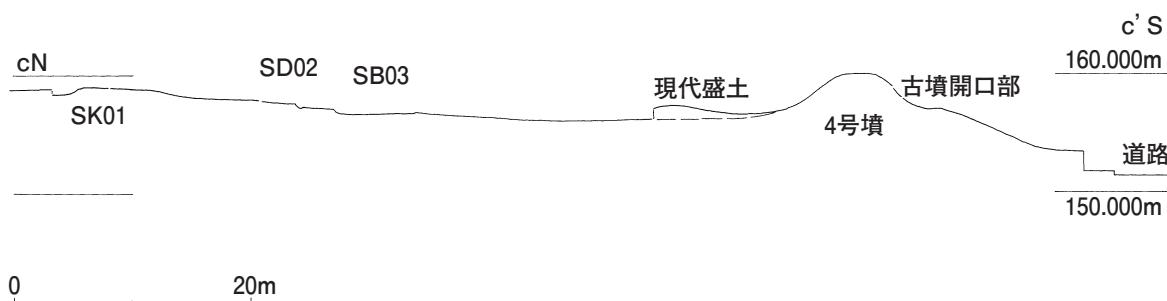
中央土坑からサヌカイト片が出土した。支柱穴からは特に遺物は出土しなかった。建物北辺から底部から体部かけての弥生土器小型壺が出土した。

#### 2) SK02

弥生時代の遺構として、竪穴建物SB05以外に6区北西で検出されたSK02があげられる。東西1.6m、南北1.1m、深さ0.4mの集石遺構である。石は最大で直径0.4m程で、これ以下の大きさの石が堆積していた。石材は花崗岩がそのほとんどを占め、その他砂岩やチャートなどを含む。検出時の平面形は、ほぼ長方形に観察されたが、完掘後は東西1.6m、南北1.1mの楕円形の掘形となった。断面観察から遺構下層では、石はまばらである。反対に遺構上面では、石を比較的密に敷きならべている様子が見られる。遺物はほとんど遺構上面の石の間からの出土であった。

遺物として弥生時代中期の壺型土器口頸部、底部が出土した。またSK02の南西約1mのところで、サヌカイト剥片が出土している。

石を方形に敷き並べた状況から墓とも思われるが、残念ながら現状で遺構の性格を述べる材料はない。



第7図 調査区及び古墳断面合成図

### 3) その他弥生時代の土坑

SK22は、4区南東で検出された土坑である。東西0.9m、南北0.6m、深さ0.25mの楕円形の土坑で、サヌカイト剥片と少量の弥生土器が出土した。切り合い関係と出土遺物から弥生時代の遺構と考えられる。

SK09は、4区南西で検出された、東西1.2m、南北0.8m、深さ0.15mの楕円形の土坑である。土坑の南辺が赤く焼け、焼土と炭化物と少量の弥生土器が検出された。

SK08は、4区南西で検出された土坑である。東西0.8m、南北0.7m、深さ0.2mの規模である。南半は搅乱によって失われている。遺構底面には、径0.3mの花崗岩が出土した。堆積土は、紫赤褐色泥砂でサヌカイト片が出土した。

SK20は、5区南で検出された、東西0.4m、南北0.9m、深さ0.2mの楕円形の土坑である。出土遺物はなかったが、SK08やSK22と同様古墳時代遺構の堆積土と異なる紫赤褐色泥砂で弥生時代の遺構と判断した。

その他弥生時代と考えられる遺構として、古墳時代の遺構とは明らかに異なる堆積土が紫赤褐色泥砂のピットが10箇所ほど検出された。

## 5. 古墳時代の遺構

### 1) SB01・SB02・SB03

SB01、SB02、SB03は、SB02がSB01とSB03とを切り、SB01とSB03の切り合い関係は不明である。3棟とも方形の竪穴建物である。3棟の竪穴建物の深さは0.1mほどであり、また搅乱や竪穴建物を切る遺構などによって竪穴建物の残存状況は良くない。

中央土坑は、設けられていないようである。SB03の南東隅部のみ周壁溝が検出され、その他では周壁溝は検出されなかった。3棟とも床面に柱穴が検出された。4本柱で構成される建物と考えられる。具体的には柱穴の組み合わせは明確ではない。

SB02の北東隅で、直径1.6m、深さ0.5mの土坑SB02-SK1と東西0.5m以上、南北1.1m、深さ0.3mの土坑-SK2が検出された。SK1は深く大きな土坑で、断面には土の塊が堆積している様子が観察され、一気に埋まったようである。遺構の西肩と底面から土師器甌が出土している。SK2からは、土師器の小型甌が出土した。いずれも遺構の性格は不明である。他に竪穴建物内から土師器、須恵器の他に石包丁片が出土している。

3棟の竪穴建物の北側には、SD04が検出されている。切り合い関係から、SB01とSB03を建て区画するための段状遺構として掘削され、最後にSB02がSD04、SB01、SB03を切って建てられた。さらに北側のSD02もSD04と平行して走る溝状遺構で、3棟の竪穴建物の区画溝と考えられる。調査区の地形は、北東部に高く、南西に向かって下がっていく。SD02は、3区北から6区北東にかけて、東西約15mにわたって検出された幅0.4~1.1m、深さ0.1mの溝状遺構である。

SD02と2区SD01の出土須恵器坏身が接合する。これによりSD01、SD02がほぼ同時期の遺構であり、遺構周辺を区画や整地を行う目的の溝状遺構と考えられる。

SD03、SD08は、ともに竪穴建物に切られて検出されるため、いわゆる排水溝ではない。

SB08は、SD02をまたぐように検出された掘立柱建物である。他の掘立柱建物の柱間距離と比較すると柱間距離が長く、古墳時代の建物と性格が異なるようである。また南辺のピットを拾って梁行2間として復元すると、SD02を切ることとなり古墳時代より新しい遺構となるようである。ただし各柱穴からの出土遺物が微量で、時期を示し難い状況である。



第8図 調査区及び古墳群合成平面図

## 2) SB04

5区南で検出された東西5.9m、南北7.2m、深さ0.1mの長方形の竪穴建物である。周壁溝と中央土坑は検出されなかった。建物西辺で径1.3mほどの焼土が検出された。付近の床面は特に焼けている状態ではなかった。また焼土から特に出土遺物はなかった。建物床面でピットは9箇所検出された。P1、P2、P3、P7の4箇所が柱穴である。径0.5m、深さ0.3mの規模である。東西柱間距離は2.9m、南北東西柱間距離は3.2mである。東辺床面で須恵器坏身が出土した。

## 3) SB06

SB06は、5区中央で検出された長径6.4m、短径6.2m、深さ0.3mの円形の竪穴建物である。周壁溝と中央土坑とは6箇所の柱穴とピット1箇所が検出された。柱の並びはやや歪であるが、6本柱の建物である。柱穴はP2を除き、径0.3m、深さ0.3~0.5mである。P1、P3、P4、P5の断面は、僅かに中央へ向かって傾いている。P6は、搅乱により大半が損なわれているが、かろうじて柱穴と判断できた。柱間距離は1.3~2.4mでまばらである。

中央土坑の堆積土は、炭化物を少量含む。周壁溝からは、炭化物や僅かであるが焼土も検出された。遺構内からは、少量の土師器、須恵器が出土した。

## 4) SB07

SB07は、5区北で検出された東西4.8m、南北5.4m、深さ0.1mの長方形の竪穴建物である。周壁溝と中央土坑は検出されなかった。床面からは6箇所のピットが、検出された。P3、P4、P5、P6の4本柱の建物である。柱穴は、径0.4m、深さ0.2mの浅いものであった。東西柱間距離は2.8~3.0m、南北東西柱間距離は3.8mと長い。建物内からは、少量の土師器、須恵器が出土したが、実測できるような遺物はなかった。

SB07の西辺を切ってSK17が、検出された。径0.9m、深さ0.1mの楕円形の土坑である。土師器小型甕の底部が出土した。

## 5) SB09

6区北西で検出された、2間×4間の東西棟、側柱の掘立柱建物である。柱穴は、概ね径0.5m、深さ0.4mほどの規模である。一部には柱痕も観察された。P68の須恵器壺口縁とP70の土師器高坏を実測図に示した。

## 6) SB10

SB10は、5区中央で検出された、3間×4間の側柱の掘立柱建物である。柱穴は、概ね径0.4m、深さ0.3mほどの規模である。西辺柱列には、柱痕が観察された。図示できるような遺物は出土しなかった。

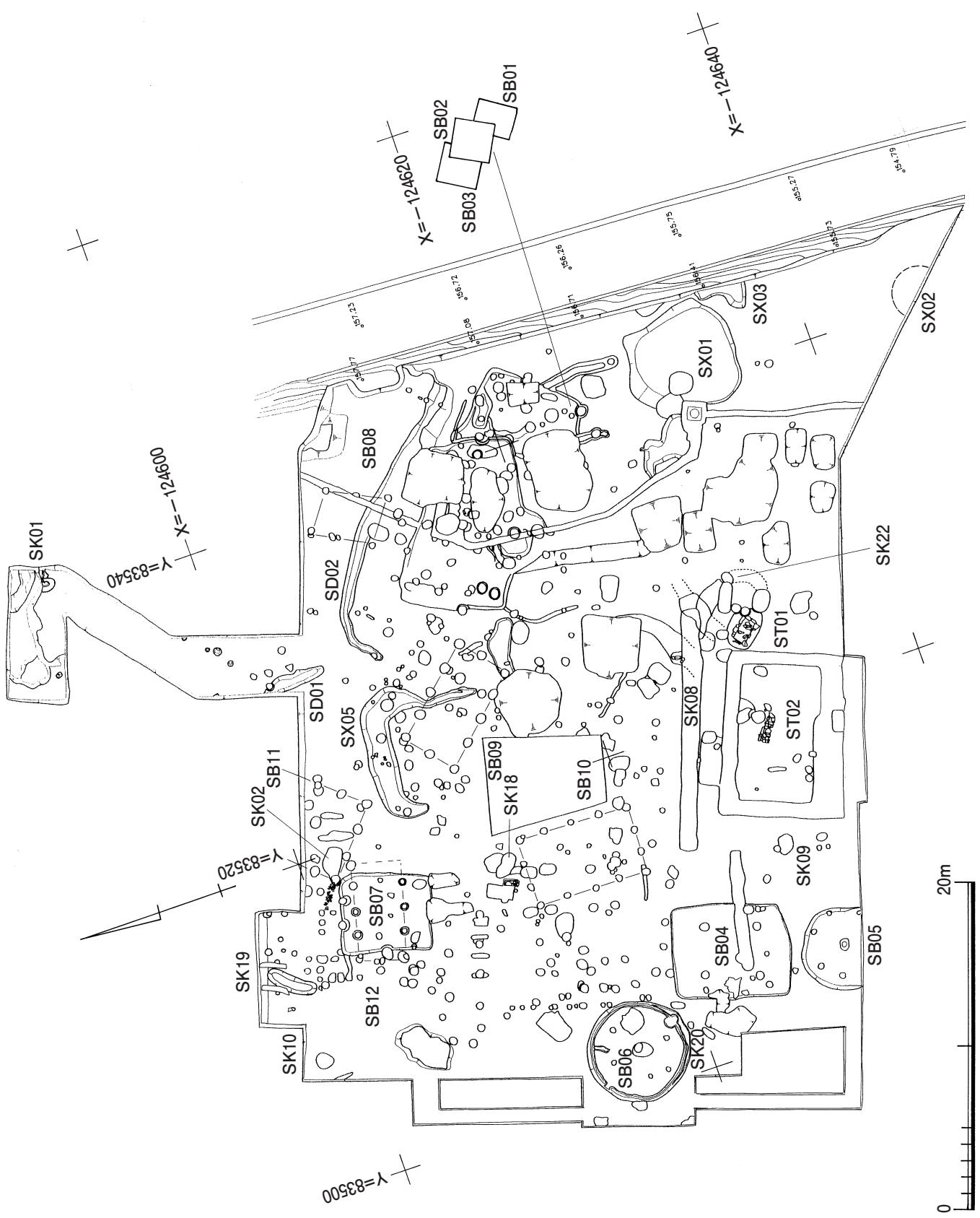
柱の配置から判断すれば東西棟であるが、平面的には南北棟と考えるべき建物である。四方にこの柱穴列以上の可能性はないようである。すぐ北側のSK18とその周辺のピット等の関係を検討すべきものであろうか。

## 7) SB11

SB11は、6区北西で検出された、2間以上×3間の東西棟、側柱の掘立柱建物であろう。北半は、調査区外となる。柱穴は、SB09と似た概ね径0.5m、深さ0.4mほどの規模である。少量の土師器、須恵器が出土したが、図示できるものはなかった。

## 8) SB12

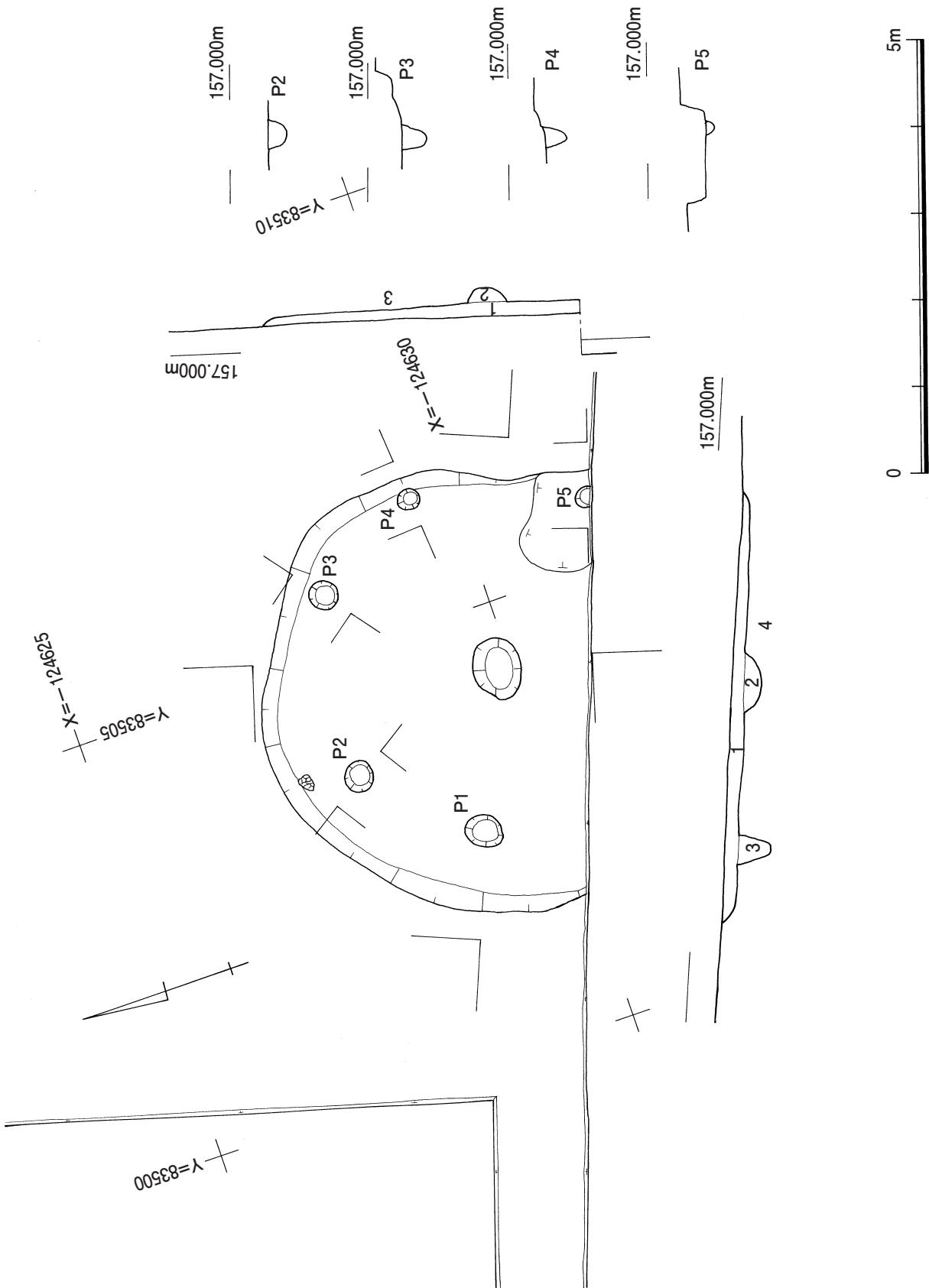
SB12は、5区北で検出された2間×4間の東西棟、側柱の掘立柱建物である。SB07をSB12



第9図 調査区平面図

の柱穴がきつっている。ただし東辺の柱穴は、木の株によって調査できなかった。また図示できるような遺物は出土しなかった。

検出された建物の主だった内容は、一覧表に示した（28頁表1）。



第10図 SB05平面及び断面図

- 1 濁黄褐色泥砂 2 濁黄褐色砂泥 3 濁黄褐色砂泥（P1、炭混、砂質） 4 淡赤褐色混層砂泥  
5 P2～P4 淡赤褐色粘質泥砂

### 9 ) SK01

古墳時代の遺構として1区で、須恵器甕を土坑にすえた遺構SK01が検出された。今回の調査地の最高所、標高159mに位置する遺構である。北半と上面は後世に削りとられている。残存している遺構の規模は、東西0.8m、南北0.9m以上、深さ0.2mである。甕内から須恵器壺蓋と鉄製刀子片が1点出土している。須恵器甕には穿孔があり、古墳墓前祭祀に関わるような遺構であろうか。

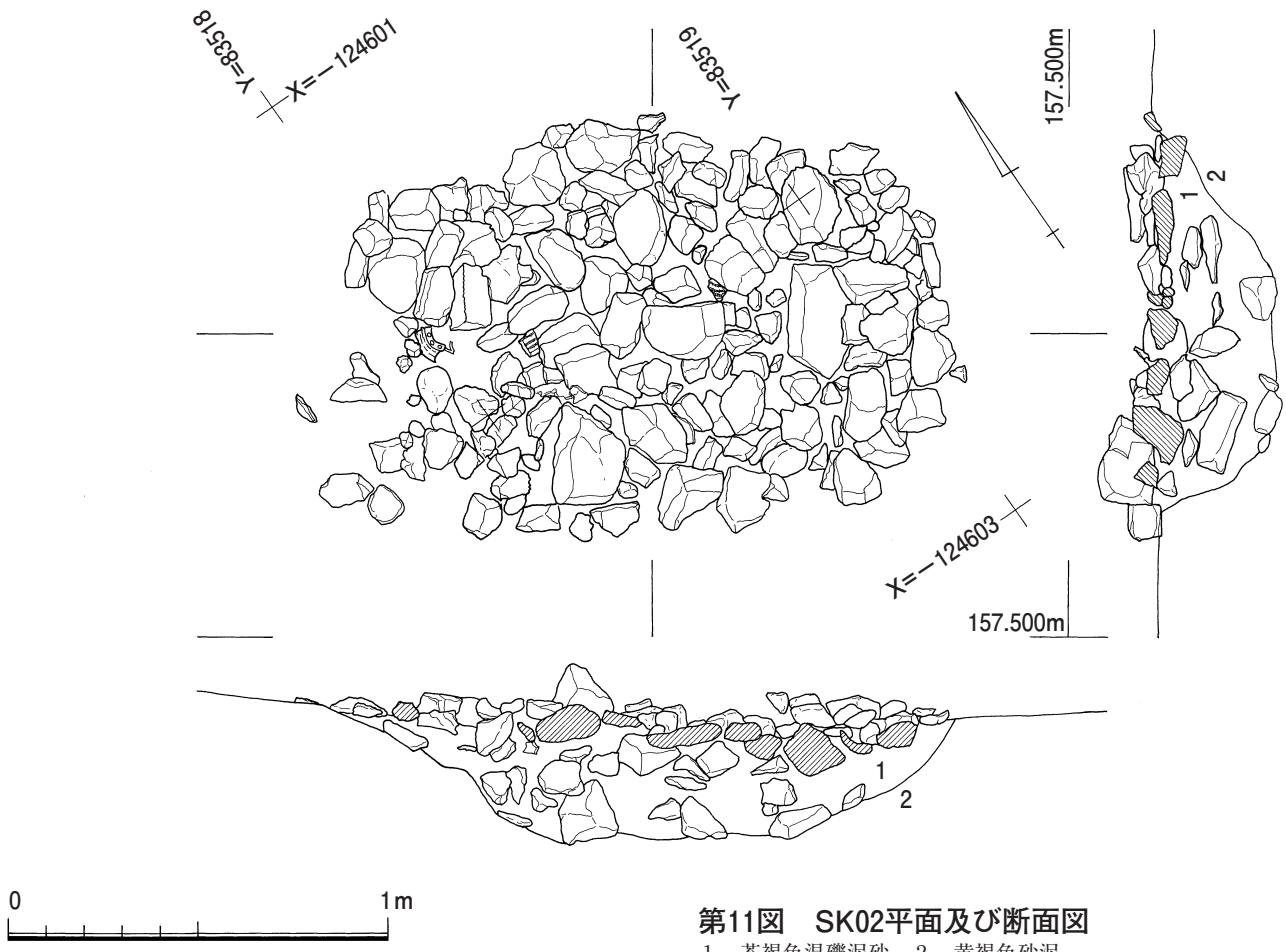
1区SK01の検出によって、さらに北側に遺構のひろがりがあることが判明した。現状建物や通路などの下には、遺跡が存在すると考えられる。

1区から2区にかけては、遺構が希薄な箇所があり、2区南半では、溝状遺構、土坑、ピットが検出された。ピットはSB09、SB11の軸線と平行する柱列は存在するが、建物にはまとまらなかった。

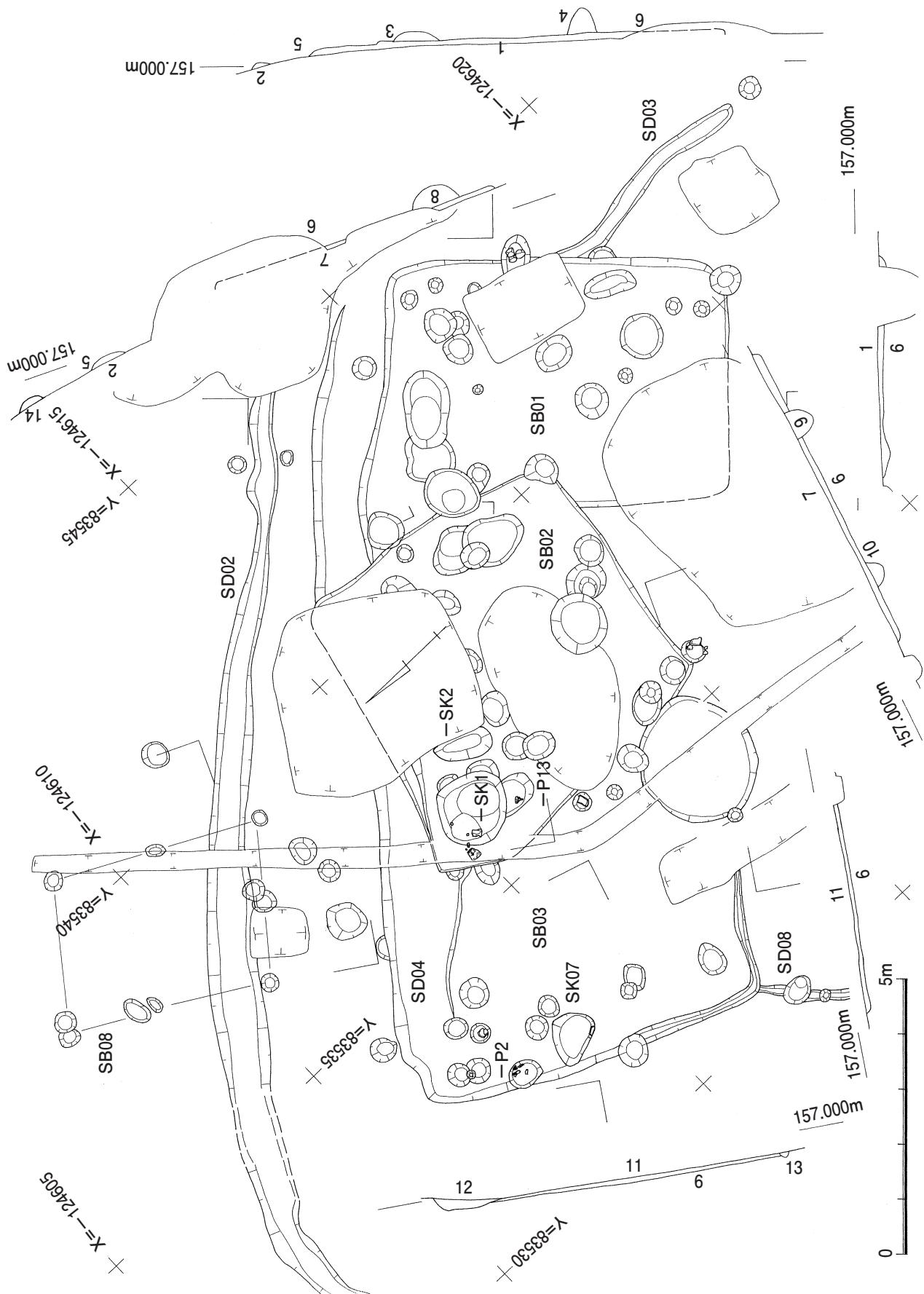
### 10) SK18

SK18は、SB10の北辺で検出された、東西1.7m、南北0.7m、深さ0.5~1.1mの不整形な土坑である。一部は攪乱によって損なわれている。上層は炭化物を多く含む堆積土であった。遺構底の東側は、径0.5mほどでさらに0.6m深くなる。この深くなった部分から須恵器壺蓋、身や最下層には須恵器壺口縁部が出土した。他に土師器、須恵器が出土した。

またSK18の東と西に近接して径0.4m、深さ0.05mの底面が赤く焼けた皿状のピット（P138・P203）が2箇所検出された。火を用いる祭祀などが行なわれた痕跡であろうか。SK18と関連あるものか、さらにSB10とSK18とを含めて関連を検討すべきものであろうか。



第11図 SK02平面及び断面図  
1 茶褐色混礫泥砂 2 黄褐色砂泥

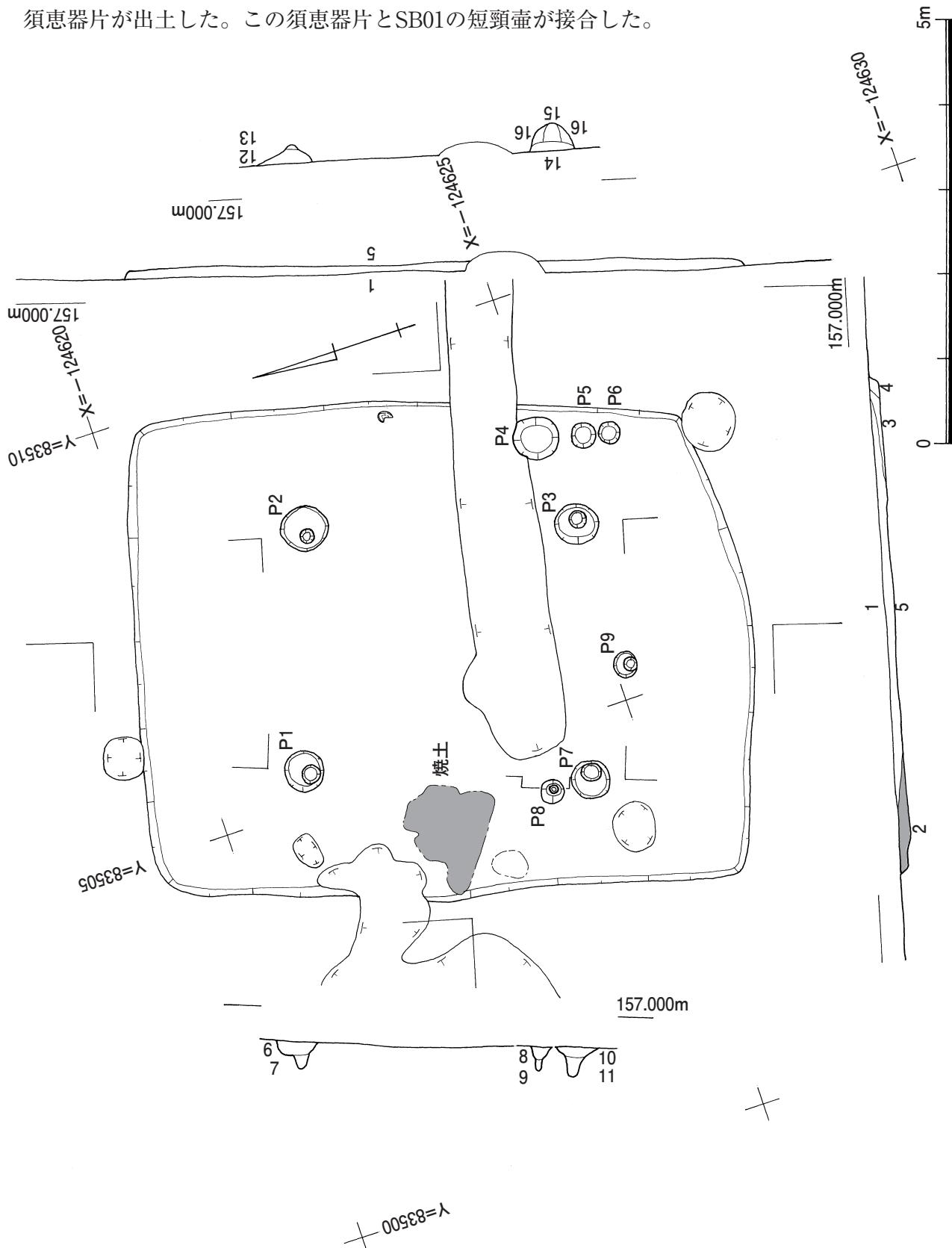


第12図 SB01・SB02・SB03・SB08平面及び断面図

- 1 淡赤褐色砂泥（炭混） 2 濁淡褐色泥砂（SD02） 3 濁褐色泥砂（SB01-SK03） 4 濁褐色泥砂（SB01-P12） 5 赤褐色砂泥
- 6 黄褐色砂泥 7 黄褐色+茶褐色+黄白色砂泥（ブロック状、炭混） 8 7と同様（SB02-P8） 9 茶褐色砂泥（P03）
- 10 7と同様（SB02-P10） 11 淡茶褐色砂泥 12 茶褐色砂泥（SD04） 13 淡茶褐色泥砂（SB02周壁溝） 14 濁淡赤褐色砂泥（P18）

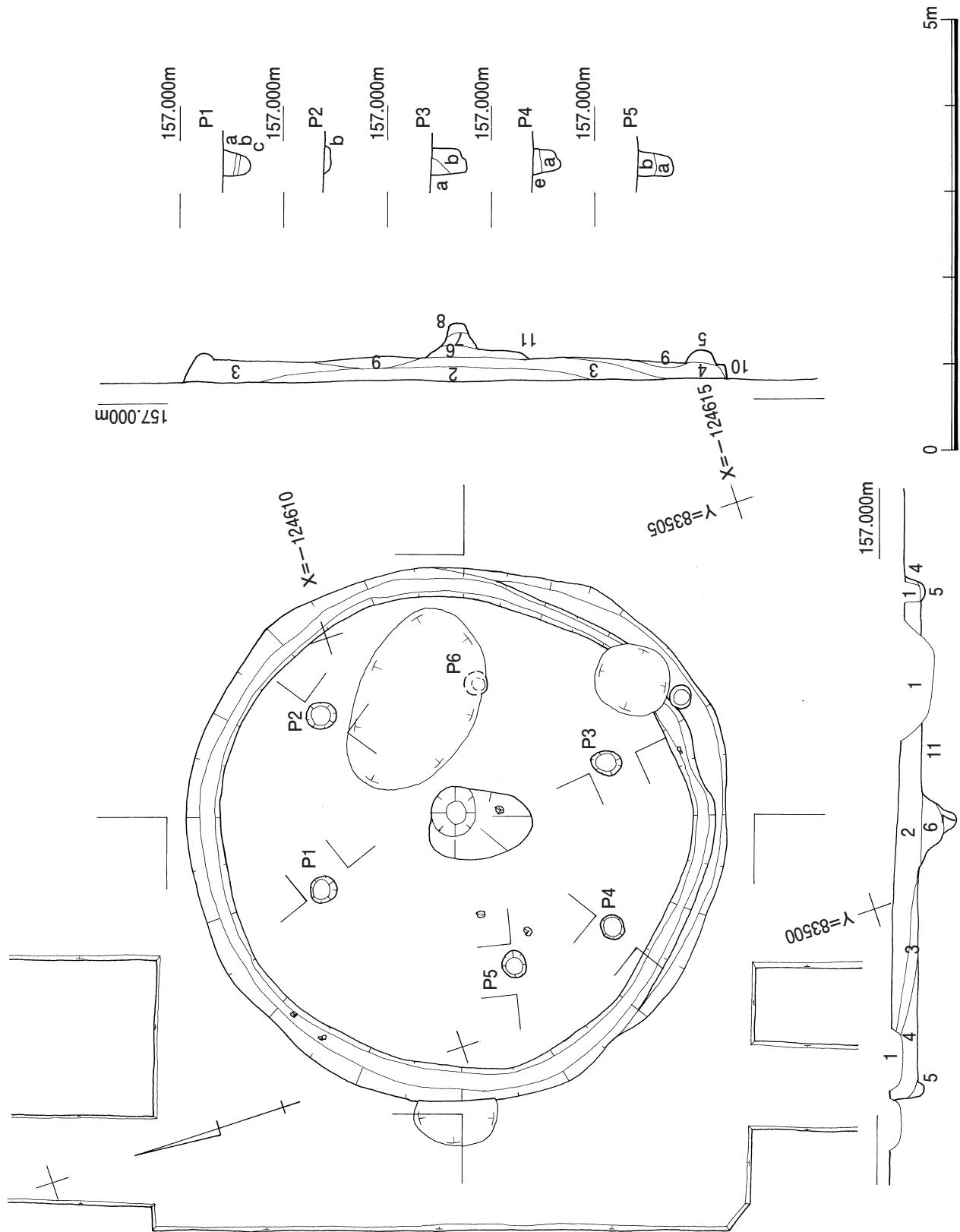
### 11) その他古墳時代の土坑

SK10は、5区北で検出された直径1.1m、深さ0.1mの不整形な土坑である。少量の土師器、須恵器片が出土した。この須恵器片とSB01の短頸壺が接合した。



第13図 SB04平面及び断面図

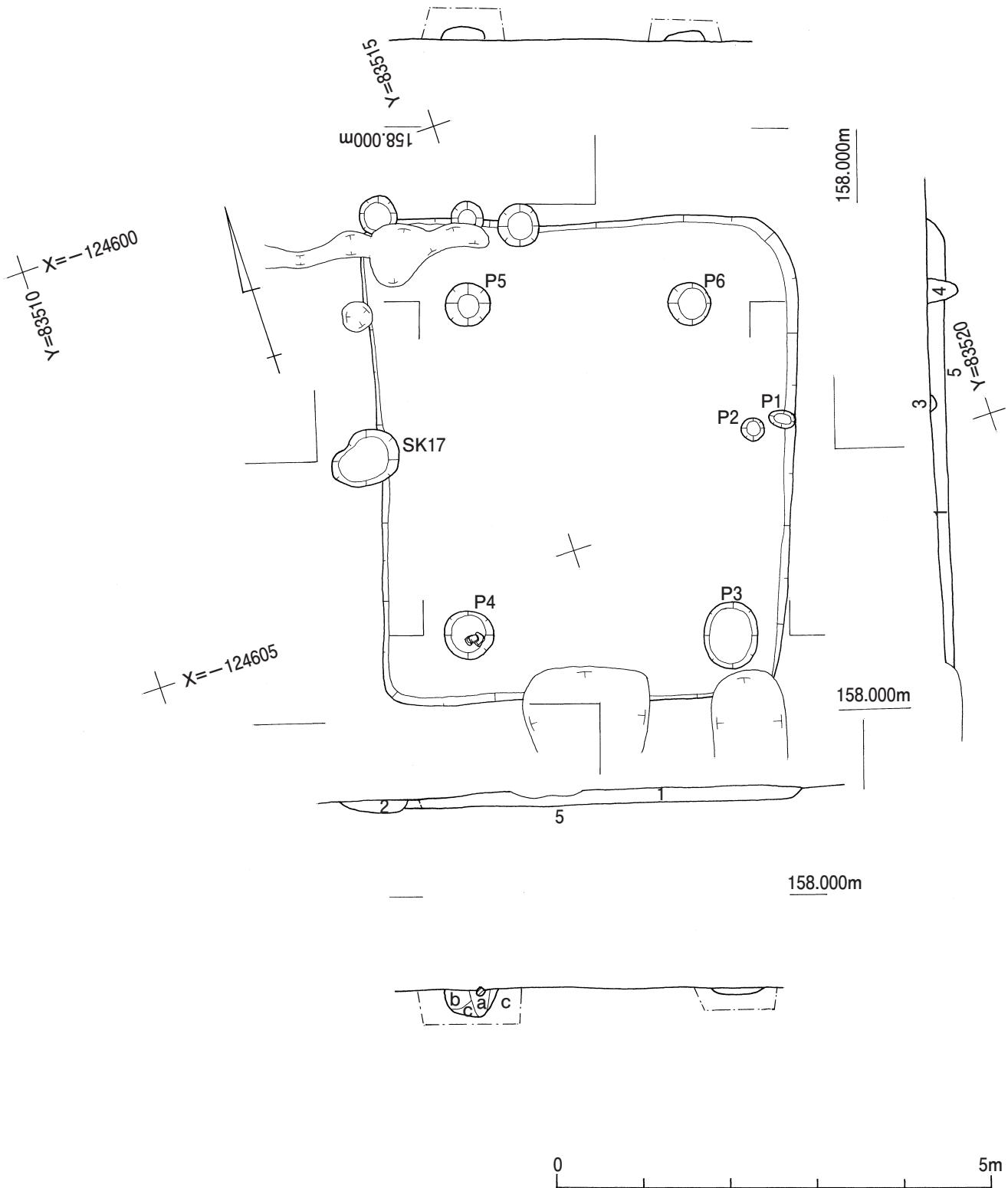
- 1 濁黄色砂泥 2 赤褐色泥砂(焼土、炭混) 3 赤褐色泥砂 4 黄褐色泥砂 5 黄褐色混礫砂泥 6 濁黄褐色+灰色泥砂
- 7 灰色泥砂 8 濁淡赤褐色泥砂(焼土、炭混) 9 8より暗い 10 濁茶褐色泥砂 11 10より灰色 12 淡赤褐色泥砂(炭混)
- 13 濁淡赤褐色泥砂(炭混) 14 濁黄褐色泥砂 15 14より暗い 16 14より明るい



第14図 SB06平面及び断面図

1 搅乱孔 2 短茶褐色泥砂 3 茶褐色泥砂 4 3より小礫多く含む 5 濁黄褐色泥砂 6 茶褐色混層砂泥  
 7 暗茶褐色混層砂泥 8 7より砂質 9 暗黄褐色泥砂 10 3より黄色 11 黄褐色混礫泥砂 12 P1～P5 淡褐色泥砂  
 a 炭混 b 明 c 暗 d 砂質 e 焼土混

SK19は、5区北辺で検出された土坑で、設計変更により北側に一部拡張して調査を行なった結果、東西1.0m、南北3.2m、深さ0.2mの南北に長い土坑であることが判明した。土師器、須恵器片が出土した。合わせてこの北拡張区では、他にピット9箇所が検出された。しかしながら新たに建物などとしてまとまる結果とはならなかった。

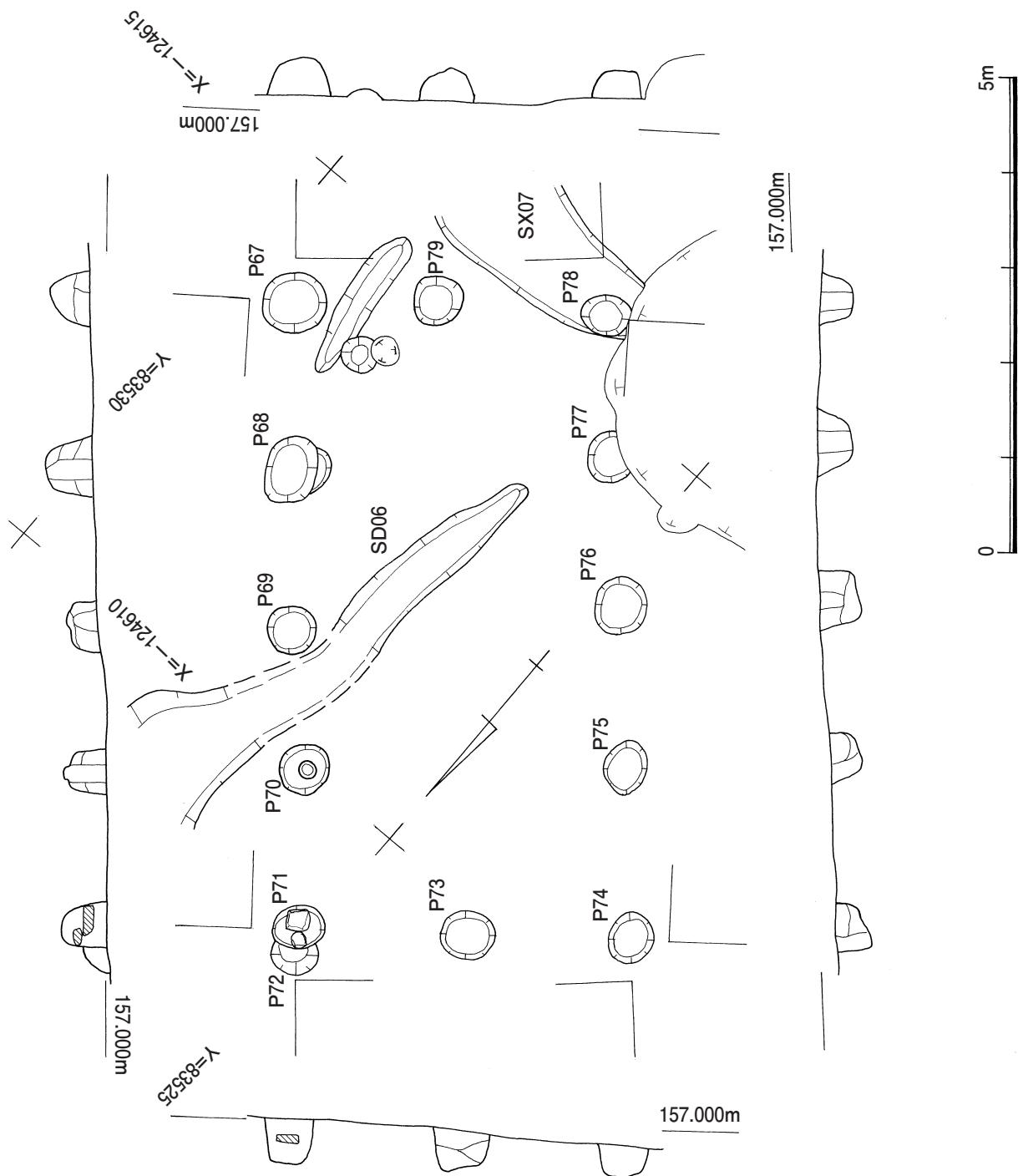


第15図 SB07平面及び断面図

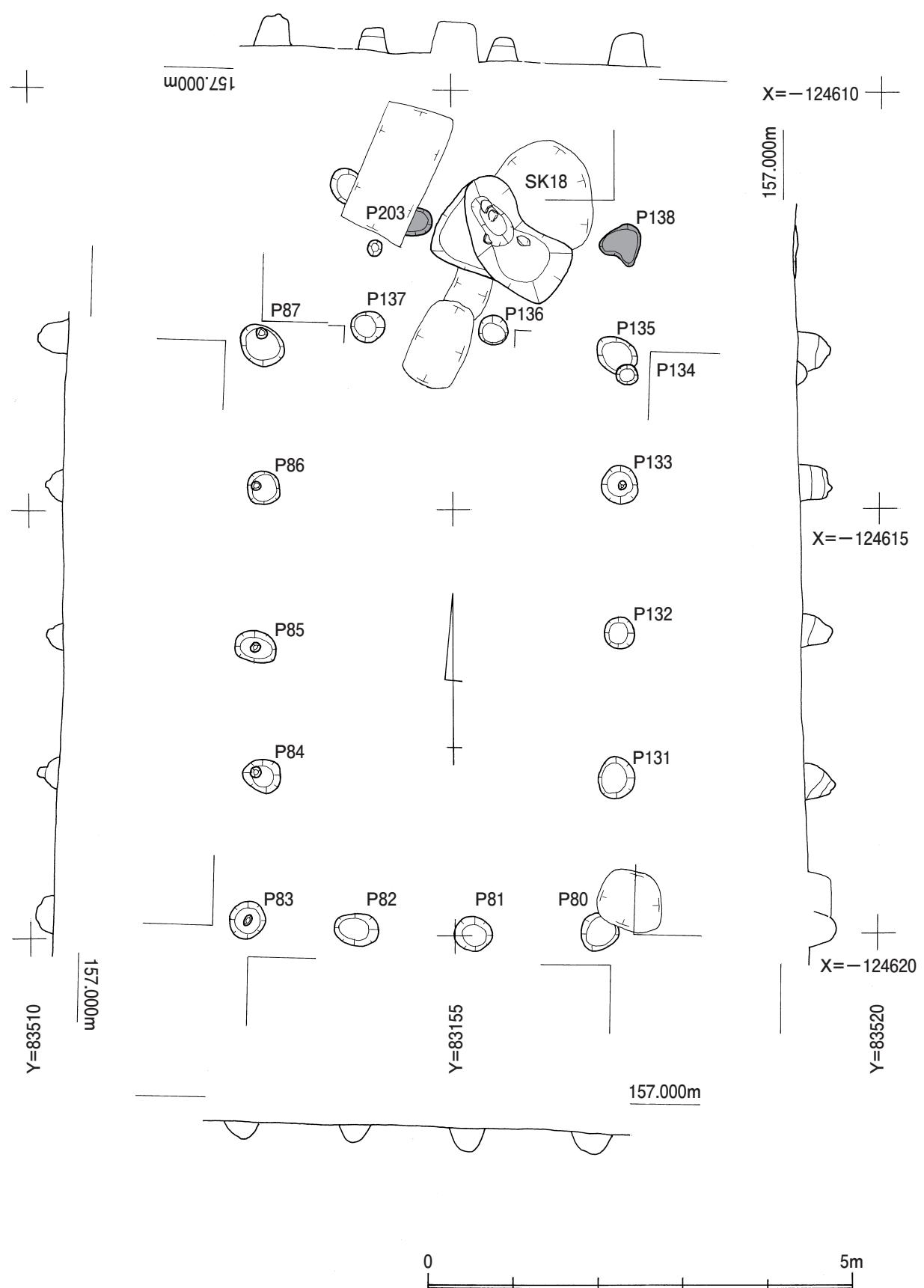
1 黄白色泥砂 2 茶褐色泥砂 (炭混、SK17) 3 茶褐色泥砂 (ブロック状) 4 黄褐色泥砂 5 P3~P6 濁黄褐色泥砂  
a 炭混 b 明 c 暗

## 12) SX02

3区南の南端部では、須恵器甕片が集中して出土する箇所があった。遺構検出につとめたが、浅い凹みに遺物が集中していたという状況である。3号墳墳丘裾から3mほどの距離であり、墓前祭祀が行われた痕跡かとも考えられた。須恵器甕は、接合すると全体の約1／2ほどが復元された。調査区南側に、須恵器破片と遺構のひろがりがもう少しあるのであろうか。現状において、これ以上の推論はできない。



第16図 SB09平面及び断面図

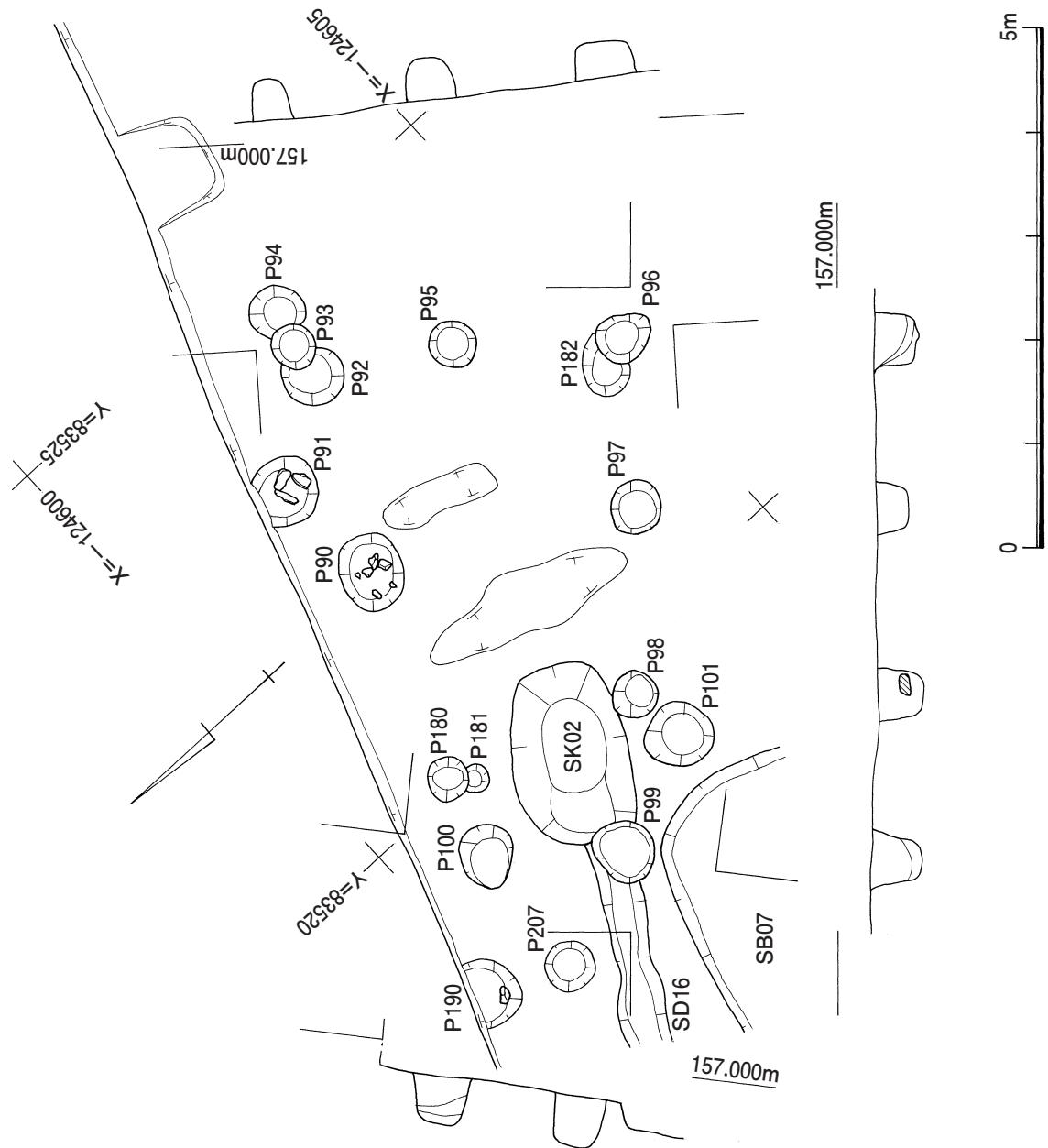


第17図 SB10平面及び断面図

### 13) SX05

SX05は、6区北西で検出された東西約8m、南北約2m、深さ0.2mほどの不定形な遺構である。北側が深く南に浅い遺構である。SX05は、緩傾斜の地山面の地形を整形する目的の遺構と考えられる。堆積土とともに径0.3m前後の礫も多く堆積していた。遺構底面には、5箇所のピットが検出された。またSX05の南東部からは、幅0.5m、深さ0.1mの溝状遺構SD06として調査した。ともに古墳時代の土師器、須恵器が出土している。SB09との切り合い関係は不明である。

SX05の南側の空間は、SD06を合わせて一辺6mほどの方形の区画となり、調査作業の中で竪穴建物となる可能性も考え調査を行ったが、竪穴建物には結びつかなかった。

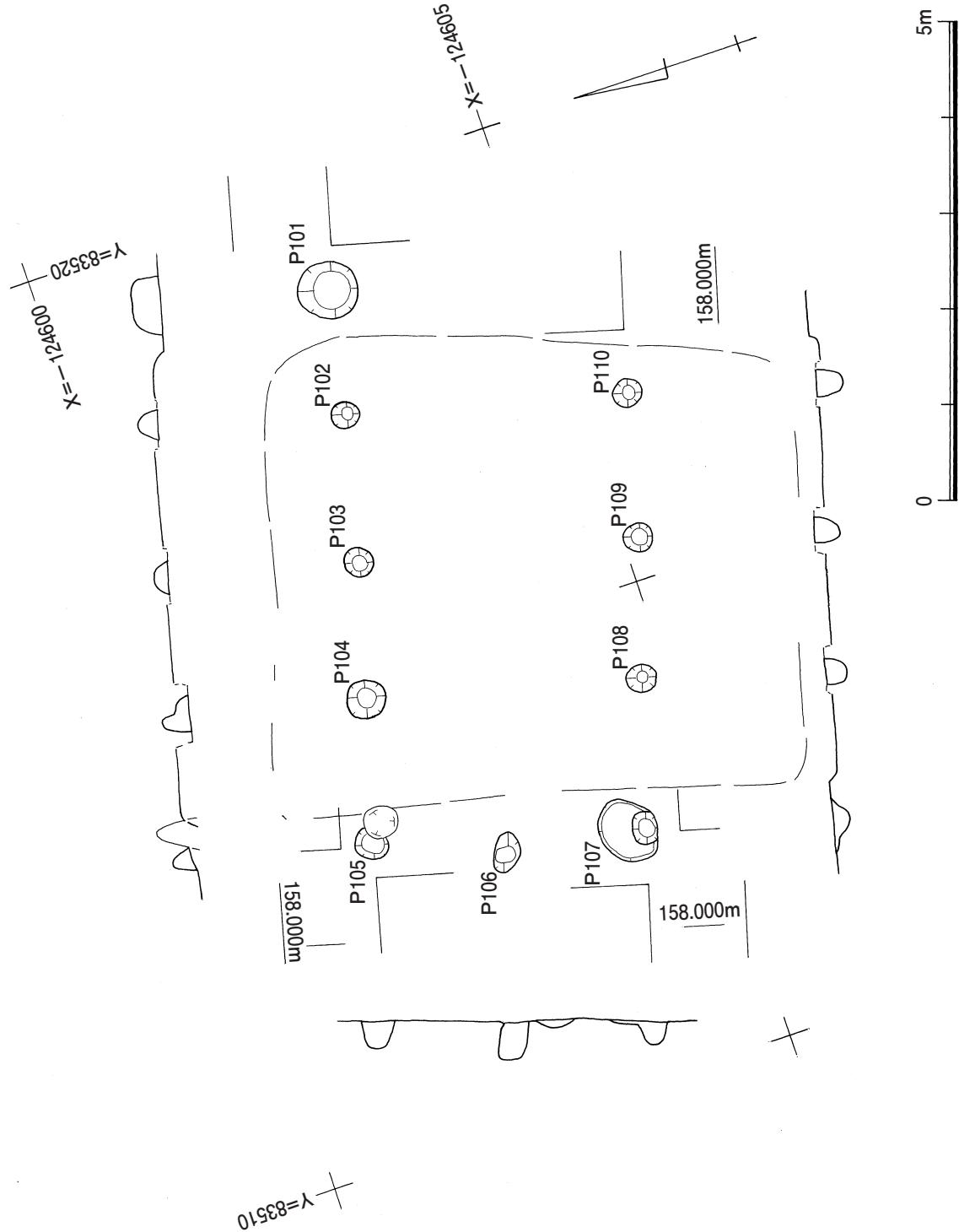


第18図 SB11平面及び断面図

14) ST01

4区南東と南西で箱式石棺を検出した。2基とも表土直下で検出され、遺構上面は削りとられていた。ST01は、4区南東で検出された東西1.7m、内法1.4m、南北1.1m、内法0.6m、深さ約0.3mの箱式石棺である。掘形規模は、東西2.5m、南北1.8m、深さ約0.3mである。掘形の東側一部は、攪乱坑と小土坑（SK14・SK15）によって損なわれていた。

東辺小口は、長軸0.4mほどの石材2個で構成する。西辺は、長軸0.4mほどの石材1個のみ



第19図 SB12平面及び断面図

表 1 懸穴建物・掘立柱建物等一覧表

懸穴建物	形状	規 模	床面 標高	周壁溝	支柱穴	排水溝	中央 土坑	出土遺物	備考
SB01	長方形	東西4.6m 南北6.2m	156.6m	無	4?	有?	無	須恵器环身、 鐵器	SB01(旧)・02(新)・ 03(旧) 切り合い、 損壊
SB02	方形	東西5.6m 南北5.6m	156.5m	無	4?	無	無	須恵器环身	搅乱で大きく損壊
SB03	方形	東西6.0?m 南北6.4m	156.6m	有	4?	有?	無	須恵器小壺、 土師器甌	南東部のみ周壁溝
SB04	長方形	東西5.9m 南北7.2m	156.6m	無	4	無?	無?	須恵器环身、 鐵器	西辺中央部焼土有
SB05	円形	直径5.2m	156.6m	無	5以上	無?	有	弥生土器、 サヌカイト、	弥生時代 南半部調査区外
SB06	円形	長径6.4m 東西4.8m	短径6.2m 南北5.4m	156.5m 157.0m	有 無	6	無	土師器、須恵器	支柱穴が内傾
SB07	長方形				4	無	無	土師器、須恵器	上面で砥石

掘立柱建物	間×間	梁行×桁行(柱間)m	検出面 標高	形式	棟方向	方位	備 考
SB08	1間×2間	2.6m	3.9m	157.6m	側柱	南北棟	N29°E
SB09	2間×4間	3.6m	7.2m	156.8m	側柱	東西棟	N38°W
SB10	3間×4間	4.2m	6.8m	156.7m	側柱	東西棟?	真北
SB11	2?間×3間	3.2m~	5.0m	157.3m	側柱	東西棟	N49°W 北へのびる可能性有
SB12	2間×4間	2.9m	5.8m	157.2m	側柱	東西棟	N73°W 東側梁行柱穴不明?

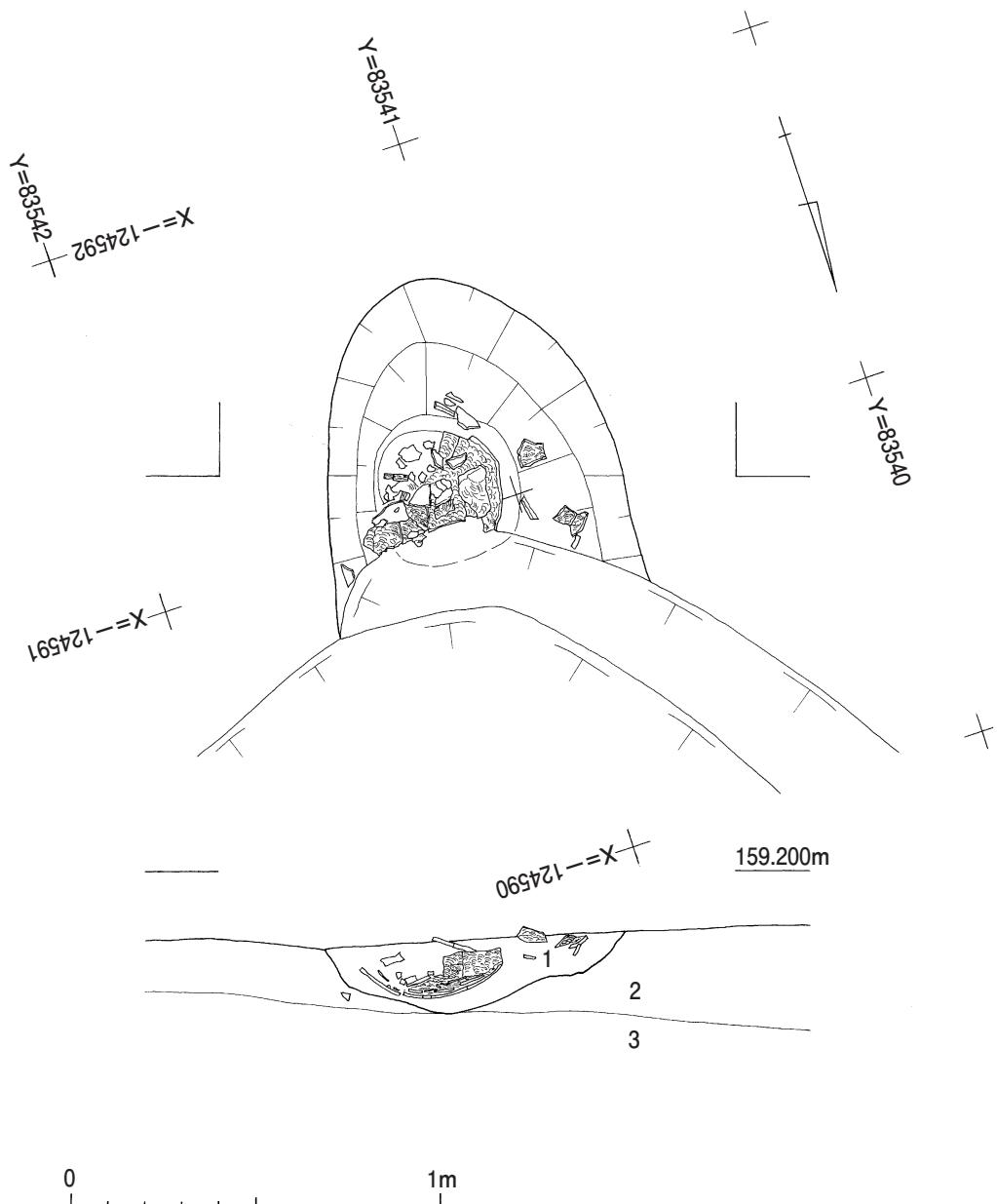
## 埋葬施設軸方位

埋葬施設	主体部	主体部軸方位	床面標高	備 考
4号墳	石棚付両袖式横穴式石室	N26°E	156.2m推定	磁北よりN34°E
ST01	箱式石室	N43°W	156.9m	
ST02	箱式石室	N54°W	157.1m	

が残存しており、東辺と同様と考えられる。南辺は、東隅と西隅と考えられる石材が2個残存している。北辺は3個の石材から構成され、東端の石材のみ花崗岩で、残りの石材すべてが周辺に産する凝灰質砂岩である。主軸は、N43°Wで西へ傾く。

棺内には、落ち込んだと思われる石材が4個検出された。棺内東部には、菱形の扁平な石の上に土師器塊を2個並べたように検出された。枕として配置されたと理解できる。中央には底面から0.1mほど浮いた状態で土師器塊1個が検出された。埋葬後に棺上に置かれたものではないかと考えられる。また南辺西隅部で須恵器小型提瓶が検出された。土師器塊2個が頭位であれば、提瓶は足下に置かれたものと考えられる。提瓶の把手部分は矮小化しており、円形の粘土を貼り付けただけのものである。

類例として棺外の副葬であるが、西山6号墳埋葬施設4出土の提瓶があげられる。また時期はやや遡るが同7号墳埋葬施設3では、ひとつの埋葬施設から提瓶が5個体出土するという例もある<sup>1)</sup>。



第20図 SK01平面及び断面図  
1 淡黄褐色泥砂（炭混） 2 黄褐色砂泥 3 黄白色混礫砂泥

ST01の掘形内と棺内の土壤すべてを水洗し、玉類などの有無を確認する作業を行なったが、特に遺物は検出されなかった。ST02も同様に関連する部分の土壤を水洗したが、特に遺物は検出されなかった。

#### 15) ST02

ST02は、4区南西で検出された棺底に石敷のある箱式石棺である。検出された石敷は東西1.8m、南北0.5mで、北辺の3石ほどが棺の立ち上がりを示すものと考えられる。北東の一部は、小土坑（SK11・SK12）によって損なわれていた。

残された石材の痕跡などから東西2m、南北0.4m以上の箱式石棺と推定される。主軸は、N54°Wで西へ傾く。2基とも5号墳墳丘裾から10m足らずの距離であり、古墳との関係性、時期差、位置関係など検討すべき課題が多くある。

#### 6. 中世の遺構

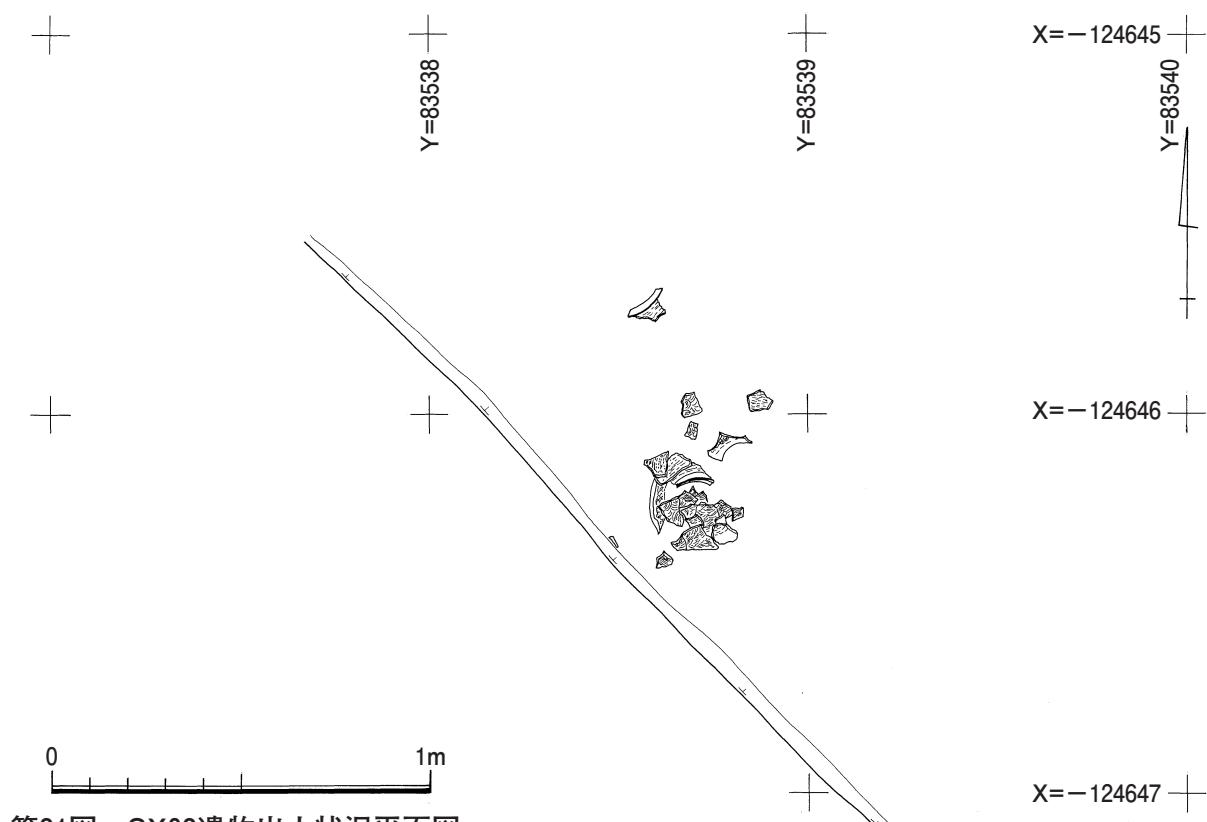
##### 1) SK07

SK07は、SB03を切る東西1.0m、南北0.8m、深さ0.1mの歪な土坑である。堆積土には焼土を多く含むが、遺構面は焼けていない。南辺には幅0.2m、長さ0.25m、厚さ0.05mの板状の凝灰質砂岩が立てられた状態で検出された。墓標石と考えられる。堆積土と墓標石から中世頃の火葬墓と思われる。時期を示す出土遺物はなく、少量の土師器が出土した。

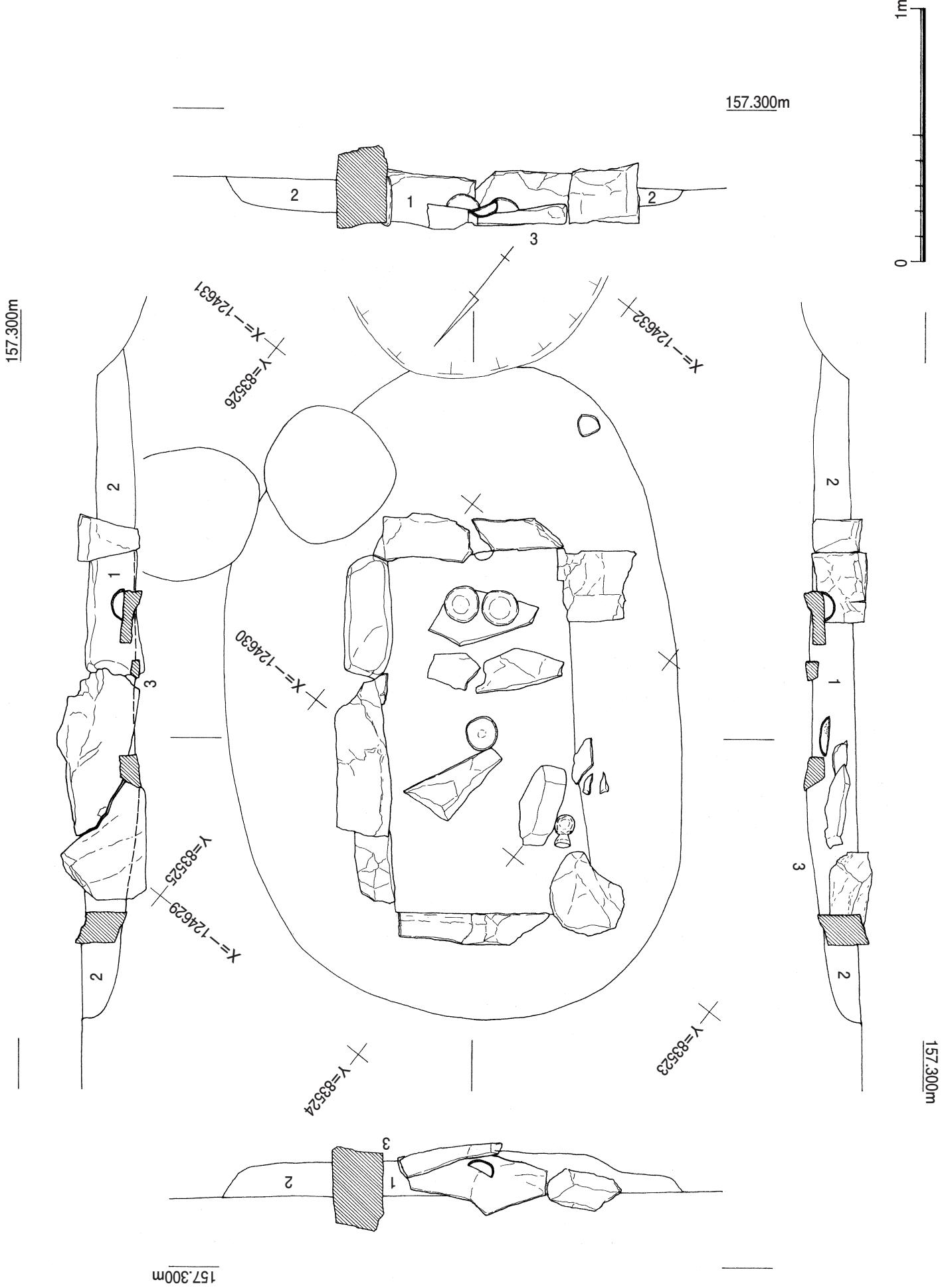
##### 2) SX01

SX01は、3区南で検出された東西5.8m、南北6.6m、深さ0.2mの不整形な深い落ち込み状遺構である。規模から当初堅穴住居にも思われたが、床面、柱穴などではなく、堆積状況からも落ち込み状遺構であると判断した。弥生土器、古墳時代須恵器、中世後期の土師器塙が出土している。

SX03は、SX01の南西で検出された東西1.6m、南北3.2m、深さ0.2m不整形な深い落ち込



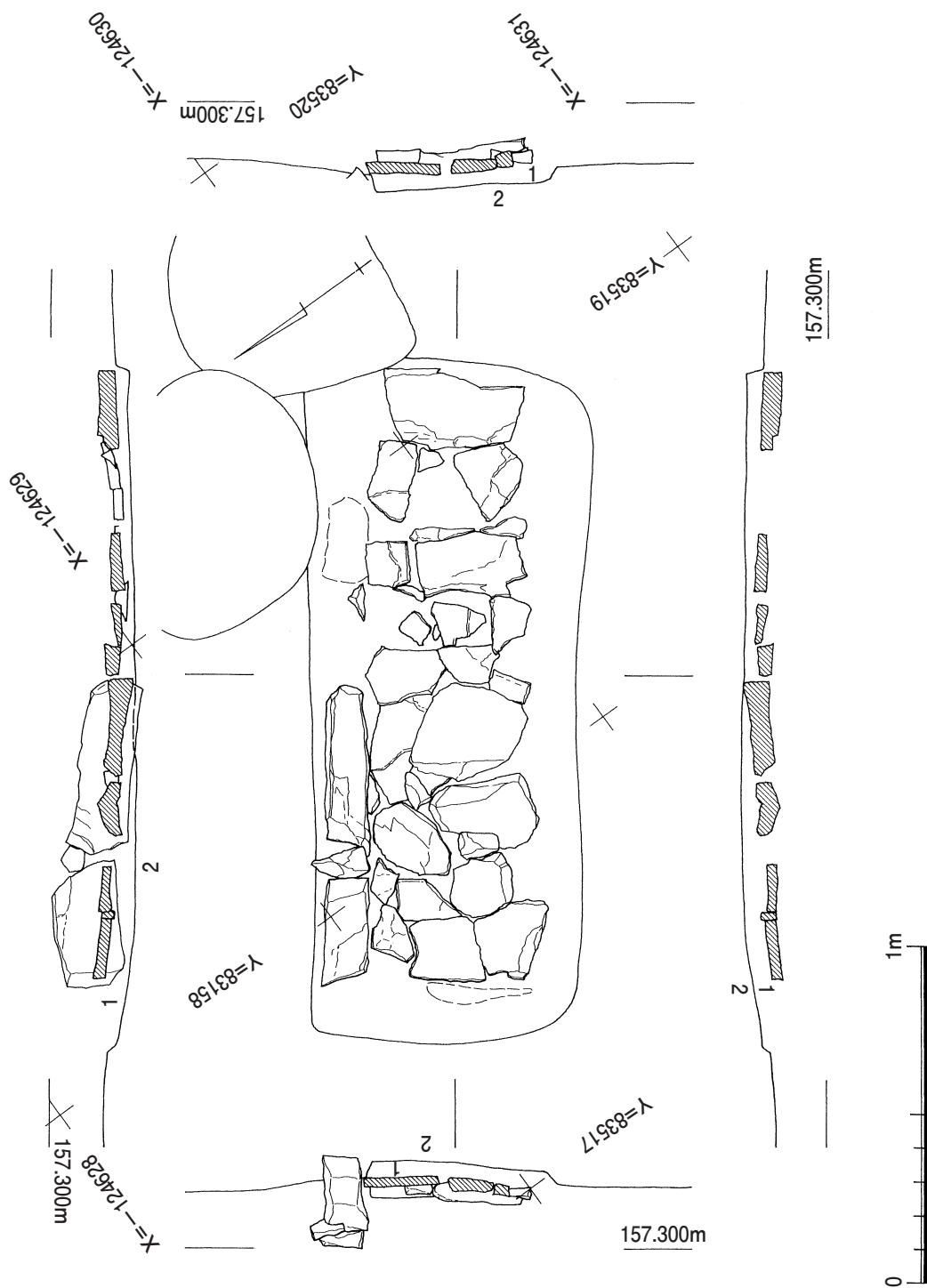
第21図 SX02遺物出土状況平面図



第22図 ST01平面・断面及び見透図

み状遺構である。SX01と同様に、南東に向かって下がる遺構面上の堆積であろうと思われる。少量の土師器、須恵器片が出土した。部分的にSX01の堆積土が重なっていることから、SX01より古い堆積である。

1) 高島信之、潮崎誠「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書 I」三田市文化財調査報告書第2冊三田市教育委員会1983



第23図 ST02平面・断面及び見透図

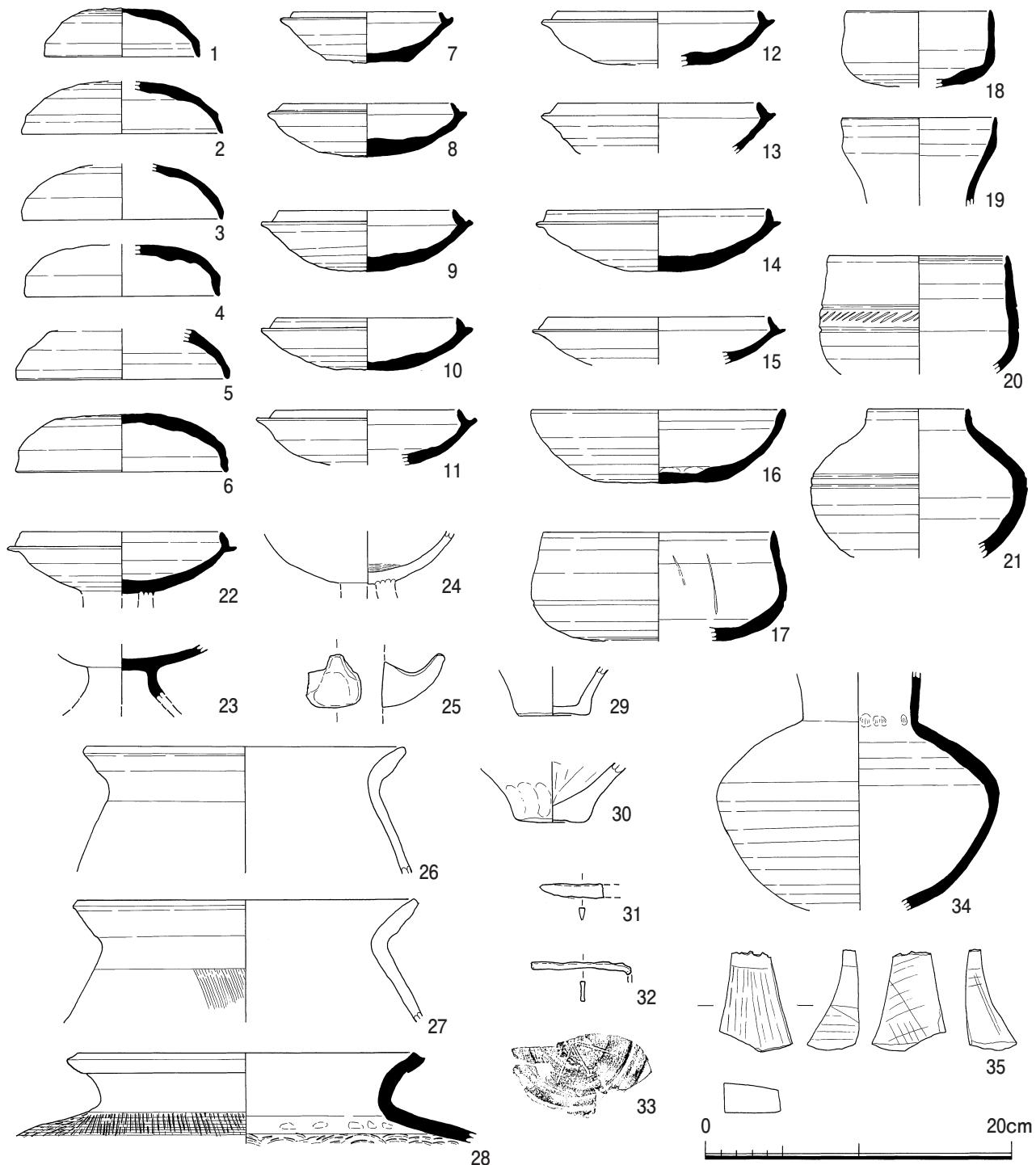
1 濁褐色+褐灰色泥砂（敷石下） 2 暗黄褐色砂泥（地山）

## 7. 出土遺物

### 1) 包含層出土遺物

第24図 1～35は、包含層出土遺物である。1～23・28・33・34は、須恵器、1～6は壺蓋、7～16は壺身、17・18は壺、19は長頸壺口縁、20は鉢、21は短頸壺、22・23は高壺、28は甕口縁、33は壺、34は長頸壺である。24～27は、土師器、24は高壺、25は甕片、26・27は甕口縁である。29・30は弥生土器、31・32は金属製品、35は砥石である。

遺構を覆う包含層となる堆積層は、6区、3区北、中央には見られるが、反対に4区、5区



第24図 包含層出土遺物実測図

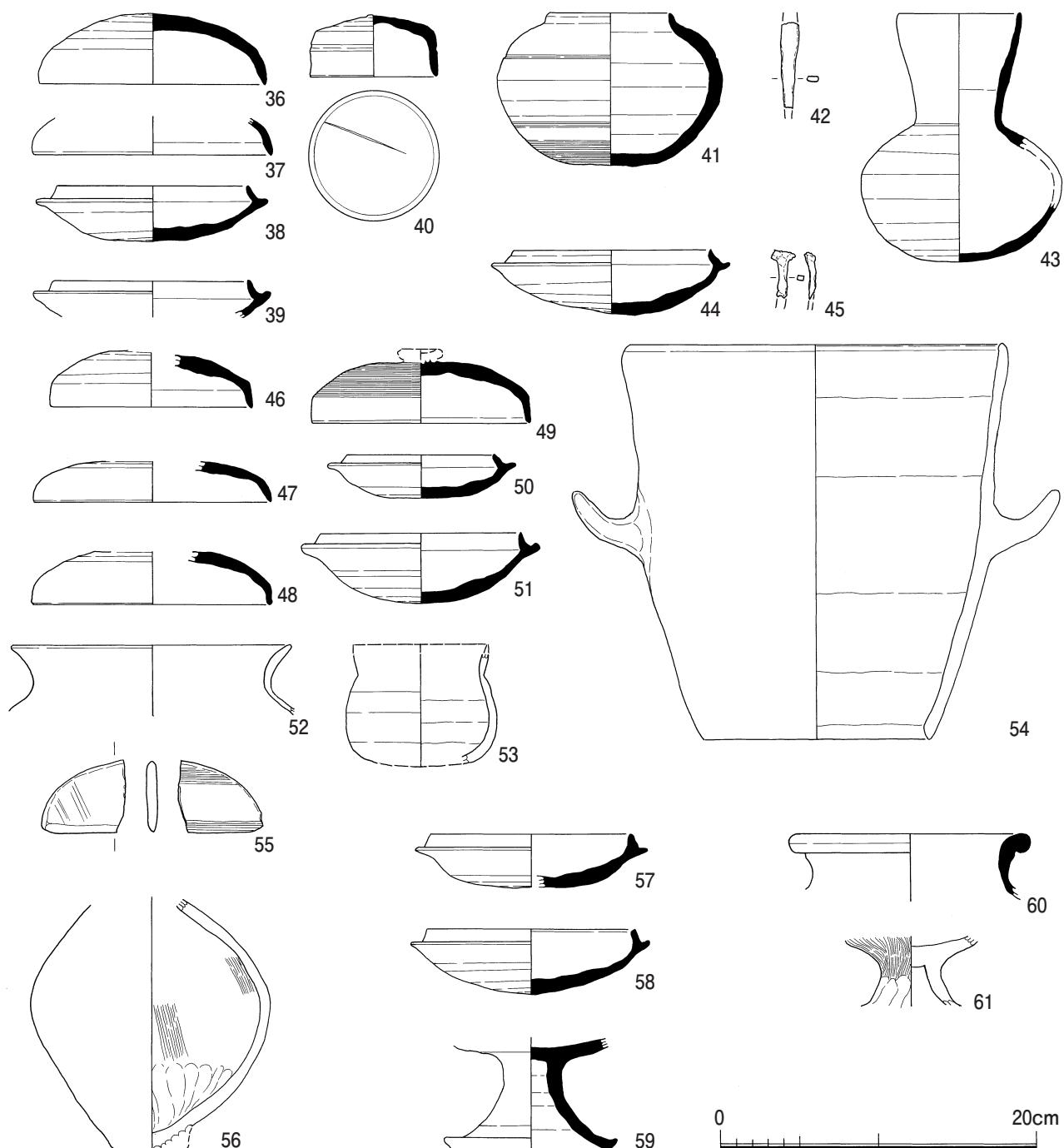
1～23・28・33・34須恵器 1～6壺蓋 7～16壺身 17・18壺 19長頸壺口縁 20鉢・21短頸壺 22・23高壺 28甕口縁  
33壺 34長頸壺 24～27土師器 24高壺 25甕 26・27甕 29・30弥生土器 31・32金属製品 35砥石

にはあまり存在しなかった。調査区北東側からの遺物がほとんどである。

図示した包含層出土須恵器は、時期差、型式差がみられ、TK209からTK217の型式<sup>1)</sup>を中心とした6世紀後半から7世紀前半にかけての時期が考えられる。

16は、口径16.4cm・高さ4.8cmのやや大型の須恵器壺である。内面底部には同心円文タタキが残る。

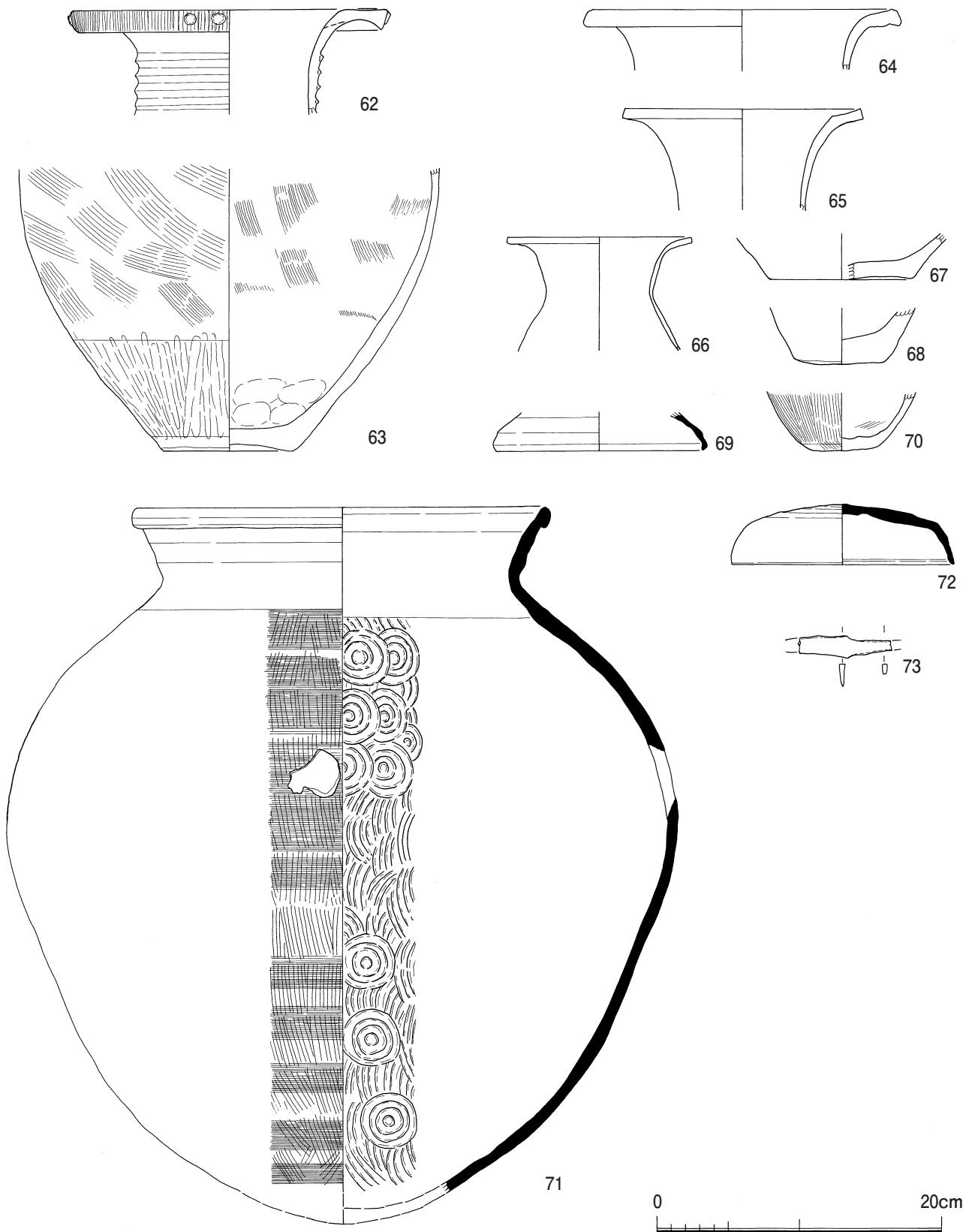
17は、口径15.0cm・最大径16.6cm・高さ7.1cm以上のやや大型の須恵器壺である。体部下半に沈線が1条めぐる。内面には工具痕跡か、ヘラ記号か不明の2条のヘラ刻み線がある。幅(2cm)や形状がSK18の97須恵器壺身のものとよく似ている。



第25図 建物出土遺物実測図

36~42 SB01 36~41 須恵器 42 金属製品 43 SB03須恵器 44·45 SB04 44 須恵器 45 金属製品 46~55 SB02  
46~51 須恵器 52~54 土師器 55 石包丁 56 SB05弥生土器 57~59 SB06須恵器 60·61 SB09 60 須恵器 61 土師器

遺物整理作業の中で、須恵器に刻まれたヘラ記号のあるものについては注意をはらった<sup>2)</sup>。図示できたものは4点である。特に特徴のあるものは見出せなかった。17と97は「縦二」本の



第26図 土坑出土遺物実測図

62~67 SK02弥生土器 68 SK09弥生土器 69 SK19須恵器 70 SK17土師器 71~73 SK01 71・72 須恵器 73 金属製品

ヘラ記号、40は「横一」、33は「鳥足」もしくは「矢印」とでも呼称するものであった。

20は、須恵器鉢もしくは脚付坏で、2条の沈線の間に、ヘラ状の工具でおさえたような列点文様がある。21は、須恵器短頸壺で、体部最大径辺りに2条の沈線を施す。22は長脚、23は短脚の高坏である。25は、土師器甌の把手で、小振りでミニチュアとも考えられる。

29・30は、弥生土器底部である。

31は鉄製刀子片であろう。SB01、SB02周辺を検出時に出土したものである。32は、用途不明鉄製品である。

34は、長頸壺である。SB01、SB02を検出時に出土したものである。遺構内出土遺物とは接合しなかった。

35は砥石で、SB07検出時に出土したものである。白色の砂岩である。

## 2) 建物出土遺物

36・37は、須恵器坏蓋で、36の天井部はまるい。38は、須恵器坏身でSB01床面からの出土品である。40は須恵器小壺蓋である。天井部に、「横一」のヘラ記号がある。41の須恵器短頸壺は、前項でも述べたがSK10出土破片と接合する。

42は鉄製品である。用途は不明である。

43は、SB03で出土した遺物の中で図化できた須恵器長頸壺である。

44は、須恵器坏身でSB04東辺中央床面から出土した。45は、鉄釘である。

46～48は坏蓋である。49は須恵器高坏蓋で、天井部にはカキ目を施す。50は、須恵器坏身でSB02床面から出土した。52は、SB02-P13から出土した土師器甌である。53は、SB02-SK 2、54は、SB02-SK 1から出土した。53は、小型の土師器壺である。口縁端部、底部は欠損している。内外面の調整は不明で、粘土紐接合痕が観察される。54は、甌である。53と同様に内外面の調整は不明であった。

55は、石包丁片で、穿孔された部分はない。いわゆる塩田石製である。

56は、SB05出土の弥生土器小型壺体部である。内面には底部にはユビナデ、部分的に縦方向ハケがのこる。外面の調整は不明であった。遺物の時期については、言及できるものが少なく後期頃としておく。

57～59は、SB06、60・61はSB09出土遺物である。少量の遺物であるが他の竪穴建物と大差ない時期が考えられる。

前項でも述べたが、SB02が、SB01、SB03を切る。また38と50の床面出土遺物を比較しても新旧の時期差はあらわれている。また38・44・58については、大きな時期差は見出しがたい。従って竪穴建物のおおよその時期は、6世紀後半から7世紀初頭にかけての時期と考えられる。

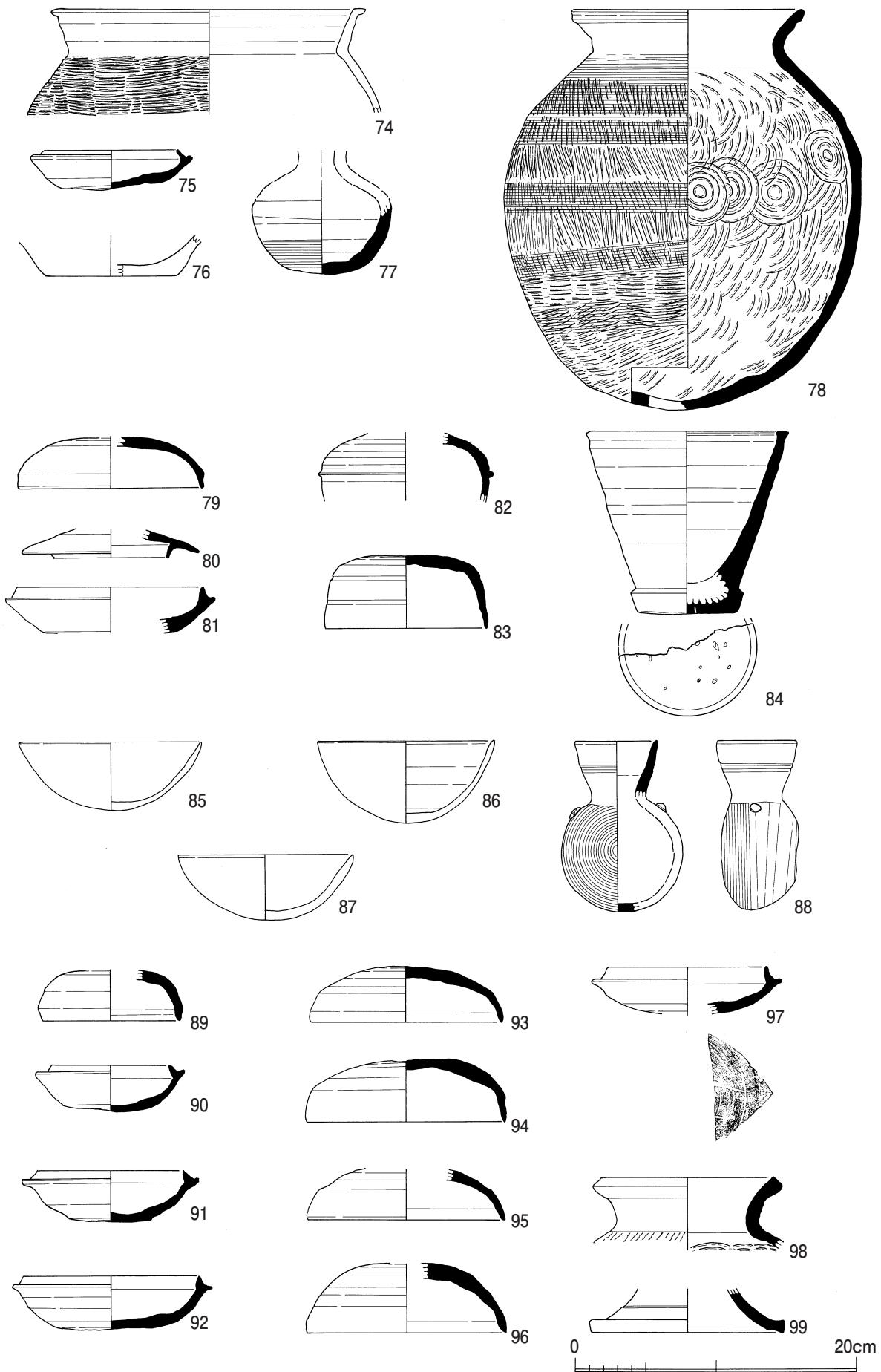
## 3) 土坑出土遺物

62～67はSK02から出土した弥生土器である。62は、口縁端部には、縦方向の刻みを施し、2個対の円形浮文が4箇所以上貼り付けられている。頸部には突帯が4条以上貼り付けられている。この口縁部の部分的な特徴だけで速断はできないが、近似例として奈カリ与遺跡や田能遺跡があるようである<sup>3)</sup>。

64～66は壺口縁で、SK02から器種として甌の出土はないようである。

68は、SK09から出土した弥生土器底部である。69は、SK19から出土した須恵器坏蓋である。

70はSK17から出土した土師器小型甌底部である。外面は縦ハケ、内面にはわずかにハケ調整が残存する。



第27図 土坑・溝状遺構等出土遺物実測図

74~77 SX01 74 土師質鍋 75·77 須恵器 76 弥生土器 78 SX02須恵器

79~84 SX05須恵器 85~88 ST01 85~87 土師器 88 須恵器

89~92 SD02須恵器 93~99 SK18須恵器

71は、SK01から出土した口径28.4cm、最大径47.0cm、復元高50.4cmの中型須恵器甕である。外面はタタキ後、カキ目調整、内面は同心円文タタキである。焼成はやや悪い個体である。接合復元すると最大径より少し高い位置に、外部からの穿孔がある事が判明した。甕内からは72須恵器坏蓋と73鉄製刀子が出土した。

SK01は、71の口縁端部などから、TK43型式、6世紀後半頃と考えられる。

#### 4) 土坑、箱式石棺等出土遺物

SX01からは、弥生土器76、古墳時代須恵器75、77と74の土師質壙などが出でている。74は、中世の時期の遺物として図示できた唯一の遺物である。体部外面はタタキ、内面はナデ調整である。口縁部内外面ともにナデ調整で、端部は外側へややひろがる。13世紀頃であろう<sup>4)</sup>。

78はSX02から出土した、口径16.6cm、最大径25.4cm、高さ28.6cmの小型須恵器甕である。接合復元すると底部に外面からの穿孔があった。外面はタタキ後、カキ目調整、内面は同心円文タタキである。底部は、磨耗しておりよく使用されたものと思われる。平方1号窯出土土器(3)168と形態、法量、調整技法など酷似している個体である<sup>5)</sup>。

79は、坏蓋、81は坏身、80は、脚付長頸壺蓋であろう。82は器種不明である。器壁は薄く、内面はナデ、外面上部はケズリ、1条の突帯があり、下半はナデ調整である。83は、須恵器壺蓋として図化した。2条の沈線をもち天井部はケズリ、内面はナデ調整である。

84は、須恵器スリ鉢である。胎土、焼成は良好である。この器種に関して「従来、口縁部としていた方を下にする」と従来底面にある刺突孔、線刻を使用して擂面として使用するという、最近の研究成果がある<sup>6)</sup>。

SX05からは、比較的多くの遺物が出土したが、須恵器坏の底部もしくは天井部などが多く図化できたものはわずかであった。

85~86は、ST01から出土した土師器塊である。3個体とも内外面の残存状況は悪く、外面調整は不明、内面はナデ調整と思われる。口径は、12cmでほぼ同じ、高さは、10~12cmである。

85は南側、86は北側に伏せて、配置された枕と考えられる。87は、棺上供献土器である。88は、口径5.8cm、最大径8.6cm、高さ12.1cmの小型提瓶である。欠損のない遺物である。把手部分は矮小化し、退化して円形浮文のような粘土小円板を貼り付けている。表面にはカキ目を施し裏面は、ケズリの後ナデ調整である。口頸部も内外面ともナデ調整である。口縁部には1条の沈線が施される。焼成は良好で、一部自然釉で黒く光沢がある。被葬者の愛用品であったのであろうか。ST02からの出土遺物はなかった。

88から導き出される時期は、尼崎学園古墳群4号墳よりもかなり新しい時期に属する<sup>7)</sup>。少なくとも7世紀半ば頃と考えられる。

89~92は、SD02から出土した須恵器坏蓋、坏身である。

91は前項でも述べたが、SD01出土破片と接合する。須恵器坏身などから6世紀後半から末の時期が考えられる。

93~99は、SK18から出土した須恵器である。須恵器坏蓋などから同じく6世紀後半から末の時期が考えられる。

#### [注]

1) 田辺昭三「陶邑古窯址群I」平安学園考古学クラブ1966・同「須恵器大成」平凡社1981

2) 高島信之、潮崎誠「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書I」三田市文化財調査報告書第2冊三田市教育委員会1983

3) 井守徳男編「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書II」兵庫県文化財調査報告書第16冊兵庫県教育委員会1983・福井英治編「田

- 4) 岡田章一他編「兵庫津遺跡Ⅱ」兵庫県文化財調査報告書第270冊兵庫県教育委員会2004
- 5) 「三田市北摂N T内遺跡調査報告書Ⅲ」兵庫県文化財調査報告書第125冊兵庫県教育委員会1993 P140
- 6) 小田和利「須恵器擂鉢について」九州歴史資料館研究論集38 2013
- 7) 奥田智子「三田盆地の横穴石室」「南所3号墳」大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター2009

### 第3章 まとめ

今回の調査で、弥生時代、古墳時代、中世の三時代の遺構、遺物が検出された。

調査対象地は、丘陵突端部が鞍部のようになった地形で、現況は雑木林に囲まれた学園のグラウンドであった。比較的風の影響が少なく、かつて弥生時代や古墳時代の集落が営まれた地点としては適地であったと考えられる。

まず弥生時代の遺構として、竪穴建物SB05と土坑SK02があげられる。ともに出土遺物は、少量で残存状況も良くないが、SB05は弥生時代後期、SK02は弥生時代中期後半と考えられる。

出土遺物の項でも述べたが、SK02の62壺などから奈カリ与遺跡や田能遺跡出土例と近似するようである。奈カリ与遺跡は、北摂地域の影響を大きく受けた大規模集落遺跡である<sup>1)</sup>。当遺跡も同様の影響下にあったことは否定できないと考えられる。

次に古墳時代について述べると、今回の調査でのほとんどの遺構、遺物は古墳時代後期に属するものであった。竪穴建物6棟、掘立柱建物5棟、箱式石棺2基、土坑、溝状遺構、落ち込み状遺構などが検出された。

SB06は、古墳時代の円形の竪穴建物である。現状で周辺での類例は、見当たらない状態である。今後検証してゆきたい。

出土遺物から建物の時期は、6世紀後半から7世紀初頭にかけてと考えられる。また箱式石棺ST01の遺物から、7世紀半ば頃が考えられる。

最近の研究成果<sup>2)</sup>によると尼崎学園古墳群の造営時期と今回の古墳時代集落の存続時期とは微妙に異なるようである。尼崎学園古墳群がやや古く、当調査集落や箱式石棺はやや新しい時期に属する。周辺に存在する古墳群と比較しても南所古墳群はさらに古く、また中野古墳群については、実態は不明な部分が多い。乱暴であるがならべてみると、南所古墳群3号墳⇒中野古墳群駅北1号墳・4号墳・尼崎学園古墳群4号墳・稻荷神社裏山1号墳⇒尼崎学園古墳群集落⇒尼崎学園古墳群ST01となる。

第1章2項でも述べたが、弥生時代中期以降に遺跡数は、飛躍的に増加し地域ごとのまとまりが形成されていく。川除・藤ノ木遺跡の弥生時代後期末の円形周溝墓や定塚古墳群、北神N T No.45地点遺跡などから、当地域この時期における、階層分化の進行を見る能够である。地域ごとには首長が誕生してゆき、権威、権力をより集約していく時期にあたるのではないかと思われる。

こうした動きのなかで、4世紀前半頃に前方後円墳で、三角縁仏獸鏡を持つ塩田北山東古墳が出現する。畿内中央と直接結びつくような勢力の進出があったのであろう。しかしながら続く5世紀代には、現状で当地域には前方後円墳が存在しない。

榎本は、兵庫県下の前方後円墳を検討するなかで、「但馬、丹波地域は辺境的色合が強い」と分析している。栗山は、有馬郡の後期古墳の分布状況を分析し、「後期古墳の分布にはめざましいものがあり」この時期に諸勢力の進出があり、開発が進むと考察した。井守は、「日本海への重要な交通路として」この地域に、諸勢力の進出があったと考察した<sup>3)</sup>。

それが4・5世紀の後進的な状況を捉え、その後の後期から終末期古墳の濃密な分布状況を捉えた考察である。

さらに古墳時代後期での山田、川口の研究<sup>4)</sup>によると武庫川水系の左岸と右岸には、古墳の埋葬主体の分布に差異が認められるとするものである。武庫川左岸には、横穴石室を主体とする古墳群、武庫川右岸には、木棺直葬もしくは木棺直葬と横穴石室を主体とする古墳群<sup>5)</sup>が分布する。さらに横穴石室を主体とする古墳群は畿内中央からの進出勢力であり、伝統的な木棺直葬墳は、地元勢力の発現とみる分析である。

3点目として、中世の遺構はSK07、SX01などであった。時期がわかる遺物が出土した遺構は、SX01であり、土師器壙74から13世紀頃と考えられる。残念ながら、この土師器壙と「貴志義氏軍忠状案（1338年）」とは時代が異なるようである。

当初予測された中世の時期に属する遺構、遺物、特に唐崎城跡に関連するものが、現状ではほとんど無いと言ってよい状況である。今回の調査対象地には関連する箇所が含まれていなかったのであろうか。

地形図から尼崎学園敷地の北側、東側には土壘状に読み取れる箇所がある。現地での地表観察からも土壘状に見える部分もある。後世の開削や尼崎学園の造成などによる地形の改変を受けたとはいえ、少なくとも弥生時代や古墳時代の遺構が存在する。またSX05やSD02は、古墳時代の地山整形遺構と考えられる。このことからも中世頃の遺構が検出されることは不可解である。往々にして、顕著な遺構が残らないことや一過性の遺跡であった可能性もある。今後検討を加えたい。

上記のように今回の調査から、弥生時代中期後半での集落のあり方、前期古墳の出現、後期古墳群の分布状況のあり方が垣間見えた。さらに唐崎城跡の存在は、室町幕府の成立、南北朝統一の時期であり、中央と関わるこの周辺域を巻き込んだ争乱の証拠である。

このように各時期における、畿内からの諸勢力の進出と地元勢力との緊張と緩和が当地域の歴史を造りあげてきたのではないかと考えられる。

最後に調査によって様々な成果があったが、これと同時に様々な課題も浮かびあがった。今後の検討課題としたい。

[注]

1) 井守徳男他「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書」Ⅱ兵庫県文化財調査報告第16冊兵庫県教育委員会1983・寺沢薰・森岡秀人「弥生土器の様式と編年」近畿編Ⅰ1989・近畿編Ⅱ1990・岸本一宏「三田の弥生時代」「三田市史」第八卷通史考古編2010 奈カリ与遺跡では、塩田石製の石包丁が出土しない、対して古城遺跡・三田城跡、天神遺跡、川除・藤ノ木遺跡などでは塩田石製の石包丁が出土する遺跡である。

2) 奥田智子「三田盆地の横穴石室」「南所3号墳」大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター2009

3) 横本誠一「兵庫県下における前方後円墳」兵庫県埋蔵文化財調査集報第2集1974・栗山伸司「北摂における古代勢力の性格－有馬郡内の動向を中心として－」古代研究61975・井守徳男「畿内周縁部における古墳の展開と終末－兵庫県三田盆地における群集墳と終末期古墳の関連を例として－」歴史における政治と民衆1986

4) 山田清朝「北摂地域の後・終末期古墳」「籠谷古墳・宅原遺跡」兵庫県文化財調査報告第71冊兵庫県教育委員会1990・川口修実「三田の古墳時代」「三田市史」第八卷通史考古編2010

5) 尼崎学園古墳群1～6号墳の内2・6号墳は木棺直葬墳の可能性が高い。神戸市教育委員会「北区の古墳（一）」神戸市史紀要神戸の歴史第14号1986

# 写 真 図 版





1. 調査地全景(三田市街を望む) 南から



2. 調査地全景(武庫川・福知山線を望む) 西から



3. 調査地遠景(左奥頂部鎧射山) 西から



4. 調査地垂直写真



5. 調査区全景 西から



6. 調査区全景 北西から



7. 出土石器集合写真



8. ST02出土土器集合写真



1. SK01 須恵器甕検出状況 北から



2. SK02 検出状況 北から



3. SX02 須恵器甕検出状況 北から



4. SX05 遺物出土状況 南東から



5. SK18 遺物出土状況 北東から



6. SB01・SB02・SB03 全景 西から



7. SB04・SB06 全景 北東から



8. SB06 全景 北東から



9. SB07・SB12 全景 東から



10. SB04・SB05 全景 北から



11. SB10 全景 西から



12. SB09 全景 南西から



13. SB11 全景 北西から



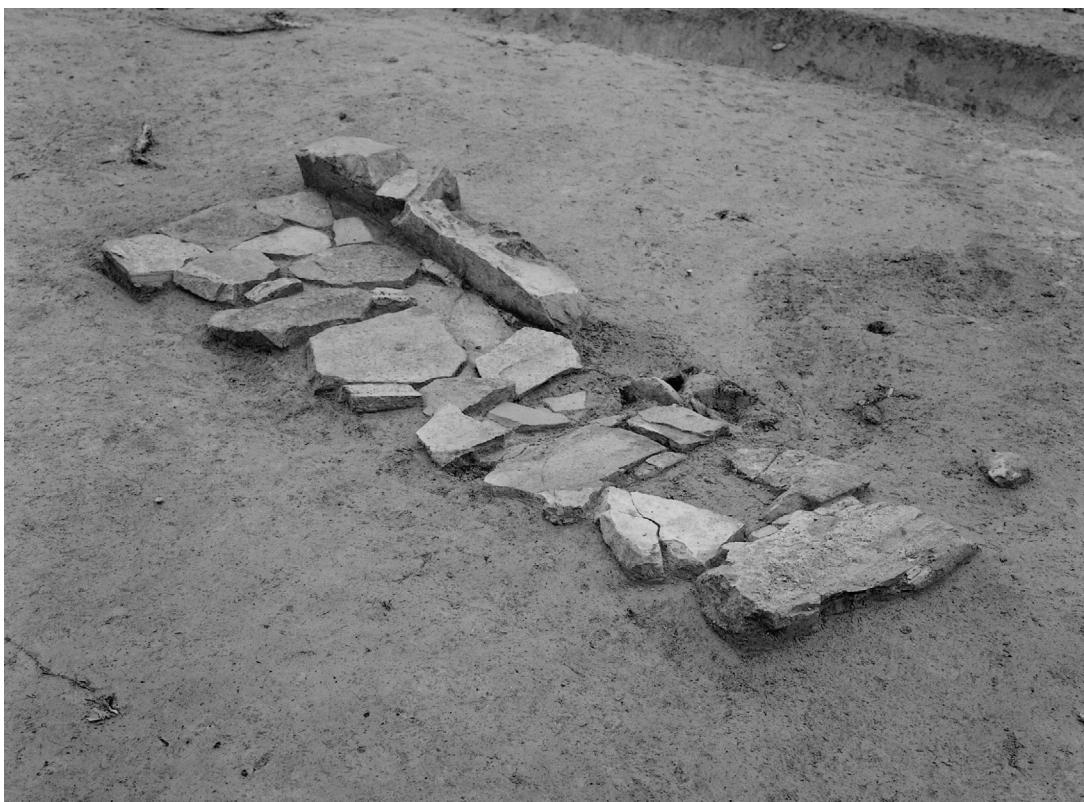
14. 調査区全景 北から



15. ST01・ST02と古墳群 北西から



16. ST01 箱式石棺 検出状況 南西から



17. ST02 箱式石棺 検出状況 南東から



18. 東南部全景 北西から



19. 調査区全景 西から



20. SB02-SK 1 土師器甌出土状況



21. SB03-P 2 須恵器壺出土状況



22. 平成25年度調査北拡張地区 東から





44



46



49



50



51



53



56



57



58



59



62



83



72



84



74



85



75



86



78



87



88



92



93



89



94



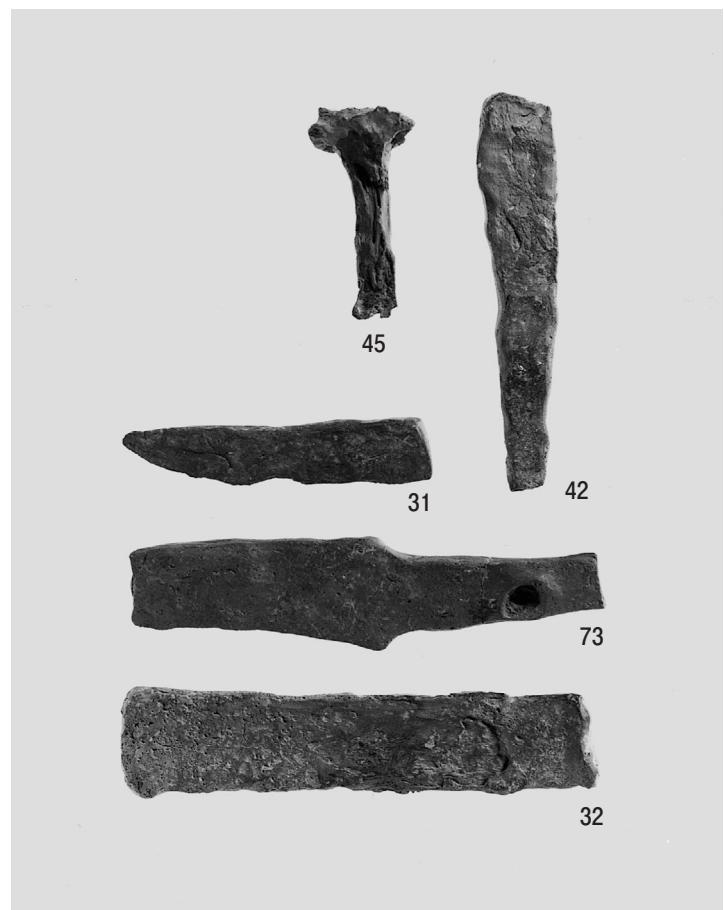
90



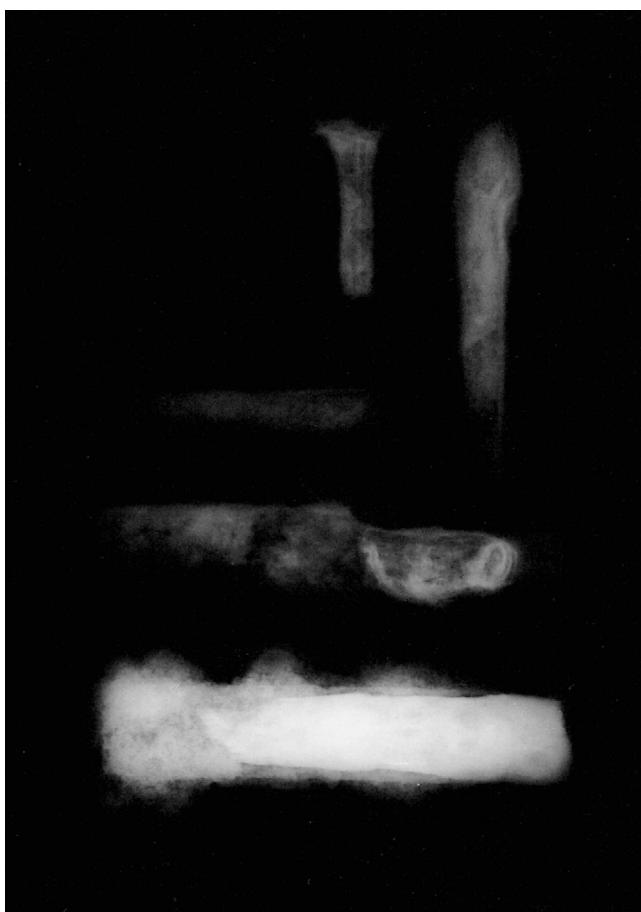
96



91



出土鐵製品集合写真



出土鐵製品X線透過画像



## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	からさきじょうあと・あまがさきがくえんこふんぐんだい1じはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	唐崎城跡・尼崎学園古墳群第1次発掘調査報告書							
副書名	神戸市北区道場町塩田3083番地における学園施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	口野博史							
編者機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号				TEL 078-322-5799			
発行年	西暦2014年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
からさきじょうあと 唐崎城跡・ 尼崎学園古墳群	ひょうごけんこうべし 兵庫県神戸市 きたくどうじょう 北区道場町 しおた 塩田3083番	281093	05- 7・333	34度 52分 24秒	135度 14分 48秒	20121204 ～20130322  20130501 ～20130508	1,686m <sup>2</sup>	記録保存調査
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構			主な遺物	特記事項
唐崎城跡・ 尼崎学園古墳群	集落跡	弥生時代 古墳時代		竪穴住居、掘立柱建物、 土坑、ピット、箱式石棺、 落ち込み状遺構			弥生土器・ 土師器・ 須恵器・ 鉄製品・ 砥石	
要約								
当調査では、弥生時代中期と古墳時代後期と中世の三時期の遺構が確認された。弥生時代中期では竪穴建物1棟、集石土坑、土坑などが検出された。古墳時代後期の遺構では、竪穴建物6棟、掘立柱建物5棟、箱式石棺2基、土坑、ピットなどが検出された。弥生時代中期や古墳時代後期の集落の様子を窺うことのできる資料が得られた。中世については、唐崎城跡に直接結びつく遺構・遺物は検出されなかった。								

## 唐崎城跡・尼崎学園古墳群第1次発掘調査報告書

- 神戸市北区道場町塩田3083番における学園施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 -

2014.3.31

発行 神戸市教育委員会文化財課

〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078-322-5799

印刷 福田印刷工業株式会社

〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号



